(基盤研究(C)研究成果報告書平成一七年度~平成一九年度科学研究費補助金

課題番号 一七五二〇一三一

第三期役者評判記の総合情報書庫構築研究

立命館大学文学部教授研究代表者
赤間
亮平成二一年三月

による研究の活動報告である。 本報告書は、平成一七年度~平成一九年度、科学研究費補助金 0

をあげて邁進している伝統ある継続研究であり、近世期に出版された の物である。そのため、戦後、日本近世演劇の基盤研究として、学界 史」までが対象とする時代は、評判記がなければ書上げられない内容 治演劇史」の三部作があり、役者評判記が刊行されていた「近世演劇 書店刊)の著者伊原敏郎には、「日本演劇史」「近世日本演劇史」「明 明期から史料の根本として重視された。例えば、「歌舞伎年表」(岩波 な翻刻本文とデータベース化を図ろうとするものである。 は、近代になってからスタートした日本演劇史研究において、その黎 「役者評判記」を発生から終焉にまでに亙って、研究資料として正確 本研究が「第三期」と称しているには理由がある。「役者評判記

よる、デジタル歌舞伎情報書庫を完成させることを目指しているもの の歌舞伎研究者の利用も想定した役者評判記の閲覧・検索システムに 文を完成させ、データベースの集合体としてWEB上に展開し、海外 三期(安永年間から享和年間まで)について、正確なデジタル翻刻本 十一巻が完成・刊行されている。今回の研究においては、いわゆる第 これまで、第一期(享保末年まで)十一巻、第二期(明和末年まで)

捗の程度を提示することにした。 であるため、それは、現状では、WEBサイトを御覧いただくとして、 もしも、印刷したとするならば、到底一冊の著作に相当するものとな 度の分量のものであるし、また、それをデータベース化した成果も、 本報告としては、研究活動の中で生まれた研究論文を掲載し、その進 翻刻本文は、第一期、第二期と同様、ほぼ各巻五百頁として十巻程 したがって、冊子の報告書としては、きわめて報告しずらい内容

研究代表者 赤間 亮 (立命館大学文学部教授)

> 研究分担者 陽子(東京学芸大学・教育学部

晃(大東文化大学・文学部・教授)

水 池 田 山 かや乃(園田学園女子大学・近松研究所教授)

神楽岡 幼子(愛媛大学・法文学部・助教授)

野 口 隆(大阪学院大学・経済学部・助教授)

千惠(立命館大学・文学部・講師)

貴昭(立命館大学・COE 研究機構・ 究員)

【交付決定額】

平成十九年度 平成十七年度 直接経費 直接経費 直接経費 1,400,000 円 900,000 円 800,000 円 間接経費 240,000 円 間接経費 間接経費 0 0 円円

総計 3,340,000 円

〔研究論

合計

直接経費 3,100,000 円

予稿集 1 号、2005、p.4 **伎資料デジタルアーカイブ」第1回デジタルコンテンツシンポジウム** 赤間亮・金子貴昭「WEB 上の教育コンテンツ活用支援としての歌舞

池山晃「歌舞伎役者と旅 『手前味噌』を中心に」 浮世絵芸術 151 号、

2006′ pp.34-41

能史研究 176 号、2007、pp.42-56 神楽岡幼子「役者絵と役者評判記|三代目中村歌右衛門を例に|」 芸

究所紀要 18号、2007、pp.41-42 齊藤千惠「原道生『歌舞伎評判記集成』の翻刻作業について」近松

[学会発表]

Ryo Akama The case of Kabuki materials, The conference of GloPAC いずり),の世界 | 相撲番付・芝居番付・長者番付一」公開シンポジ 神楽岡幼子「芝居番付について」、図書館企画展 、 一枚摺り(いちま ウム、2007.7、愛媛大学総合情報メディアセンターメディアホール (JPARC) 2008.2 Conel University

目

幕末期の江戸における役者評判記 役者評判記の享受 |洒落本 「祇園祭桃燈蔵」 から見えるものー

名古屋市史編纂資料本の役者評判記

明和期北信地方芸能の様相 『評判多賀羅船』を中心に一

異体字「薗」再考

齊藤 千惠

野 \Box 隆

24

池山

晃

12

倉橋

正恵

神楽岡幼子

1

55 30

役者評判記の享受―洒落本『祇園祭桃燈蔵』から見えるもの

神楽岡 幼 子

はじめに

享和初年の頃、「仮名手本忠臣蔵」にちなむ洒落本が続けて刊行されている。小金あつ丸作『仕懸幕莫仇手本』、『仇手本後編通人蔵』、されている。小金あつ丸作『仕懸幕莫仇手本』、『仇手本後編通人蔵』、されている。小金あつ丸作『仕懸幕莫仇手本』、『仇手本後編通人蔵』、されたものである。

品川遊里を舞台にした作であるが、神保五彌氏は次のように解説品川遊里を舞台にした作であるが、神保五彌氏は次のように解説しをみづのえにいぬの春」とあり、享和二年春の刊行と見られる。(402)の一番の見通

おりであった。この事実に「忠臣蔵」を掛けて書名としたものの中央に御旅所を設け、神輿を安置した(「江戸名所図会」)。の中央に御旅所を設け、神輿を安置した(「江戸名所図会」)。との間宿場の旅籠に燈籠を吊したことは、本書の本文にいうとの問宿場の旅籠に燈籠を吊したことは、本書の本文にいうとをの間宿場の旅籠に燈籠を吊したことは、本書の本文にいうとの問宿場の旅籠に「忠臣蔵」を掛けて書名としたものの中央に御旅所を設け、神輿を表したものの中央に御旅所を設け、神輿を表したものの中央に御旅所を表したものの中央に関する。

である。

の洒落本の一つの作風である。加減を描こうとして、「忠臣蔵」に付会している。寛政改革後加減を描こうとして、「忠臣蔵」に付会している。寛政改革後本書、品川遊里に多かった芝あたりの武家屋敷の客の野暮さ

その内容はかほよ御前に仕える女中たちが芝居ばなしに興じる様子を描いた「序幕」、おかると勘平の色模様を描いた「二立目」、拐っされたおかるの苦難を描いた「三立目」、祇園におけるおかると遊客の九太夫や伴内、平右衛門らのやりとりを描いた「大詰」からなる。洒落本として特に注目する作ではないかもしれないが、「序幕」には当時の歌舞伎ファンの姿が具体的に描き込まれており、歌舞伎には当時の歌舞伎ファンの姿が具体的に描き込まれており、歌舞伎には一次の享受の一端がうかがえる興味深い作である。特に、女中連中文化の享受の一端がうかがえる興味深い作である。特に、女中連中文化の享受の一端がうかがえる興味深い作である。特に、女中連中文化の享受の一端がうかがえる興味深い作である。特に、女中連中文化の享受の一端がうかがえる興味深い作である。特に、女中連中文化の享受の一端がうかがえる興味深い作である。特に、女中連中文化の享受の一端がうかがえる興味深い作である。特に、女中連中文化の享受の一端がうかがえる興味深い作である。特に、女中連中文化の享受の一端がうかがえる興味深い作である。

『祇園祭桃燈蔵』に描かれた役者評判記

して『桃燈蔵』に描かれた評判記は実際に刊行されたものを利用し役者評判記は正月には毎年刊行される定期刊行物であるが、果た

か、まず検討しておきたい。 ているのか、あるいは、洒落本作者の創作による架空の評判記なの

出てくる。中たちの話題の中に評判記の位付および並び順について次のように中たちの話題の中に評判記の位付および並び順について次のように、女では、その内容も『役者宝船』に基づくものなのであろうか。女

巻軸は巨撰で、ぐにやは路考が次にゐます中車はね、大上々吉の上に至といふ字が付ました(略)女形の

る三代目瀬川路考、ついで、初代岩井粂三郎(五代目岩井半四郎)、「中車」は三代目市川八百蔵、「巨撰」は二代目小佐川常世、「ぐにや富」と呼ばれた初代中山富三郎、「路考」は三にや」とは「ぐにや富」と呼ばれた初代中山富三郎、「路考」は三市川八百蔵は立役之部の筆頭役者であるが、その位付は「大上上吉」の役者の位付や並び順が『役者宝船』ではどうかというと、三代目の役者の位付や並び順が『役者宝船』ではどうかというと、三代目の役者の位付や並び順が『役者宝船』ではどうかというと、三代目の役者の位付や並び順が『役者宝船』にはどうかというと、三代目の役者の位付をあると、若女形之部筆頭が、「菊之丞事瀬川路考」とあいる三代目瀬川路考、ついで、初代岩井粂三郎(五代目小佐川常世、「谷田瀬川路考、ついで、初代岩井粂三郎(五代目小佐川常世、「谷田瀬川路考、ついで、初代岩井粂三郎(五代目岩井半四郎)、

の末尾に載る。ちなみに、 世は出勤せず、 二代目小佐川常世は正月興行から河原崎座に出勤しているが、 順と『役者宝船』のそれとは一致しない。 では「若女形巻軸」に置かれており、 初代中山富三郎の順である。『桃燈蔵』で「女形の巻軸」とされた った。このように、 「当時休 『桃燈蔵』に語られた評判記の位付および並び 若女形 前年刊行の 小佐川常世」として、 非常に人気の高い役者ではあ 『役者大功記』 (八文字屋版 役者目録

7月刊されている。 『桃燈蔵』には評判記を読み上げる場面もあり、次のような一節

[頭取]白猿丈の御出勤珍しゝ。暫の出立格別花やかにてよし。が引用されている。

後に六部にてせり出しのところ大当り

のものではないと認められる。

のものではないと認められる。

のものではないと認められる。

のものではないと認められる。

のものではないと認められる。

のものではないと認められる。

最終的には翌享和二年三月を最後に舞台を去ることになる。すなわ享和元年十一月に、役者無人の河原崎座のために再び舞台に戻り、初座頭に際し、座付口上に狂歌を披露、寛政十年十一月、六代目団十郎の勤珍し、」とあるように、白猿は寛政八年十一月に一世一代を行い、動珍し、」とあるように、白猿は寛政八年十一月に一世一代を行い、動珍し、」とあるように、白猿は寛政八年十一月に一世一代を行い、動珍し、」とあるように、白猿は寛政八年十一月に一世一代を行い、動珍し、」とあるようにある。すなわりな可能性はどうであろうか。先に白猿の評判を引いたが、「御出いる可能性はどうであろうか。先に白猿の評判を引いたが、「御出いる可能性はどうである。すなわ

披露し、その後、六部となってせり上げで登場したという。『桃燈蔵 た。 だとすると、 判記ではなく、 役者評判記の出版を待って洒落本を制作していては、享和二年の春 読み取れない。また、執筆時期と刊行時期を考えると、正月刊行の できないが、あえて通常の八文字屋版の評判記を利用しない効果は 者宝船』とは別物である。享和二年に別の評判記、例えば、前年の 和元年十一月の舞台のものであることが確かめられる。したがって、 情報と一致しており、『桃燈蔵』に取り上げられた白猿の評判は享 に 情報を期待し、どのように楽しむものなのか、当時の読者にとって 判記が描かれていることになる。このことは、当時の評判記につい ように吉文字屋版の評判記があり、それを利用した可能性も否定は 定である。しかし、先に見たように享和二年正月刊行の評判記 『桃燈蔵』に描かれた評判記は享和二年正月刊行の評判記という設 の読者が評判記からどのような情報や楽しみを得ていたのか見て 評判記の意味を教えてくれるものとも言えるだろう。 「暫の出立格別花やかにてよし。後に六部にてせり出し」とある 『桃燈蔵』 どのような内容が予想されていたかが示されていることを意味 後述のように『歌舞妓年代記』によると、舞台ではお家の暫を 享和元年十一月の舞台は久しぶりに本格的に臨んだものであっ すなわち、 を刊行することはむずかしい。洒落本作者の架空の評 『桃燈蔵』 実際の評判記でなければならない理由もなかろう。 架空であるがゆえに、 には洒落本作者の想像した享和二年版の評 逆に評判記にどのような 以下に、 役

二、役者評判記の見どころ

その姿である。三冊の内、 けられている。女たちは「皆それ~~の宮仕への暇の折には打寄り りぬ」「やまけ」「らむうゐ」「あさき」「ゑひも」「よたれ」と名付 うに館に仕える女たちである。「忠臣蔵」に取材したため、登場人 様子を描いた場面から始まる。舞台はかほよ御前の御館、 芝居ばなしに熱中する。 興味の対象は江戸の芝居の話題である。 江戸が舞台であり、江戸の読者に向けて書かれたものである。当然 の状態で黒い表紙が見え、一冊は右奥の女中が広げて手にしている かけている。中央にあるのが江戸の巻であろう。一冊は閉じたまま 顔を寄せて見入る女中が三人、一人は左に立つ女を見返り何か声を ぬ役者ゆへ江戸の部ばかり蠅のたかつたやうになりて見る」とある。 判記三冊あるをまんがちに上中ととつてみると京大坂にて一向知ら た女たちの様子が描かれている (〔図〕 参照)。 先にも引いたが、 「評 記の封切りをして」会話が始まる。挿絵にも評判記を囲んで集まっ きの女たちという設定で、そんな女たちが「五六人集まりて、評判 物は「おかる」のほかに、いろは四十七文字を踏まえて「いろは」「ち は やうになりて見る」とあるように、夢中になって評判記にかかって、 三冊あっても、まず読みたいのは江戸の巻である。「蠅のたかつた いて「一向知らぬ」とあるのはいささか大げさな表現であろうが、 て話す咄しはいつとても寐起から芝居ばなし」と例によって芝居好 「桃燈蔵」 「局、中老、 視線は中央に広げられた一冊に向けられている。『桃燈蔵』は は女中たちが評判記を見ながら、芝居ばなしに興じる 針妙、腰元、 中央に開かれた一冊にほおづえをついて お末、御仲居、 京大坂の巻に載る役者につ たもんまで」とあるよ 登場人物

燈蔵』では「至」の字がついたとして、八百蔵の評価をあげている。 わち実際に「大上上吉」のままで昨年と変わらなかったのだが、『桃 宝船』でも、「立役之部」筆頭に、「大上上吉」の位付で載る。 者との位争いは評判記を見る贔屓にとって、関心の高い着目点であ 八百蔵が一番の役者だと受けているが、役者の位付の上昇や他の役 正月刊行の評判記『役者大功記』でも、 「ちりぬ」も訥子こと三代目沢村宗十郎没後は橘屋こと三代目市川 評判記の見どころもいろいろであるが、まずは位付である。 市川八百蔵の位付を実際の評判記で見てみると、 亡くなりましたから、 上に至といふ字が付ました。 [ちりぬ] ホンニ只今では訥子は [いろは]ちりぬさん、ちよつと御らん。中車はね大上々吉の もふ橘屋よりほかに役者はござりません 享和二年正月刊行の 前年の享和元年 『役者 すな

贔屓役者の位争いの話題はさらに続く。

の巻軸は巨撰で、ぐにやは路考が次にゐます (略) わつちやア粂三が良うござりますよ。アノ粂三とのほつ (あ] そりや知れたことでござりまさア [あ] それでも粂三もまけ] そりや知れたことでござりまさア [あ] それでも粂三もまけ] そりや知れたことでござりまさア [あ] さればねへの巻軸は巨撰で、ぐにやは路考が好いております(略) [あさき]

「あさき」の問いかけに「らむうゐ」は「さればねえ」と曖昧な返め江戸の巻に名前がないのであろう、粂三郎との評価を知り得ず、かも気になるところであるが、米三郎は当時、江戸を離れているた岩井粂三郎と米三こと初代松本米三郎との評価のよしあしがどう

をして認められていたのであろう。 として認められていたのであろう。 を並び順はそれらの注文も踏まえた上での判断として、正当な評価や並び順は、役者を評価する際の基準として認められていたのである。評判記中に役者の並び順について、その贔屓が注文をつける場面はしばしば描かれるところであるが、評判記に示された位付や並び順はそれらの注文も踏まえた上での判断として、正当な評価や並び順はそれらの注文も踏まえた上での判断として、正当な評価として認められていたのであろう。

えてことであろうか。さて、引用される評文は以下の通り。演である。「褒美」がついているのもそのような特別な事情を踏まある。白猿については、先述したが、一度舞台を退いた後の特別出れごらん褒美が付ております」として示されたのは市川白猿の評でさて、次に「ちつと読んでみませう」といよいよ本文にかかる。「こ

後に六部にてせり出しのところ大当り[頭取]白猿丈の御出勤珍し、暫の出立格別花やかにてよし。

この舞台については『歌舞妓年代記』に詳しく、「市川白猿しばこの舞台については、野台の評判についても記すが、暫についても六部になってのせり出したの評判についても記すが、暫についても六部になってのせり出したの評判についても記すが、暫についても六部になってのせり出したのように享和元年の話題の舞台であり、注目の役者であった。評判のように享和元年の話題の舞台であり、注目の役者であった。評判のようにうかが、対しては、「本川白猿しばこの舞台については『歌舞妓年代記』に詳しく、「市川白猿しばこの舞台については『歌舞妓年代記』に詳しく、「市川白猿しばこの舞台については『歌舞妓年代記』に詳しく、「市川白猿しば

また、贔屓の役者の活動に関する記事も当然興味あるところであ

う。 その後も女中たちの芝居ばなしは次々と展開していくが、しばらく は、 座の所属となる。ただし、顔見世は病気のため、休みであったとい 翌享和元年九月には河原崎座にスケに出、享和二年度からは河原崎 め込まれた読み物であったことが見て取れよう。 とばも見える。やはり、 蔵贔屓のおかるが見るべき箇所は当然、男女蔵の評判なのである。 移動情報が評判記に書かれているのかどうかは示されないが、男女 りだこでござりましたヨ」と気になる男女蔵の話題を振る。寛政十 一年十一月、上方から江戸に戻った男女蔵は中村座に出勤するが、 御贔屓の滝野屋をごろんじやひ。下つた時分なぞは三座でひつぱ **贔屓のおかるの立場に立った好意的な解釈である。そのような** あちらこちらへ座を移るさまを「ひつぱりだこ」と表現するの 滝野屋こと初代市川男女蔵を贔屓とするおかるには「お前さん 「おかるさんは滝野屋の処ばかりごらんだよ」と冷やかすこ 評判記は贔屓の心情を引きつける情報が詰

贔屓の求めに適う情報を提供し続けて来たのである。しんでいたのである。当然のことではあるが、評判記もそのような役者の活躍、贔屓の役者の活動情報等に着目しながら、評判記を楽以上のように、当時の読者は役者の位付や並び順、話題の舞台や

、役者評判記を見ながらの話題

のか、以下に見ていきたい。 て行くが、当時の歌舞伎ファンの話題となるのはどのような事柄なって、評判記を見ながら、女中たちの芝居ばなしは次々と展開し

十郎との比較へと進む。 先にも触れたが、市川八百蔵の位付を話題にした後、話は沢村宗

てよふござりましたよはござりません。去年梅の由兵衛などは宗十郎よりやアかへつはござりません。去年梅の由兵衛などは宗十郎よりやアかへつ只今では訥子は亡くなりましたから、もふ橘屋よりほかに役者

中の次のような発言が見える。 八百蔵は女中に人気があった役者である。例えば、評判記にも女

者恵方参』寛政七年刊)[女中]おいらが贔屓の中車さんを早く誉めておくれ~~(『役

ござりません」とするのは、 御手柄~~」と評されるなど、 曽我十郎を演じたときには うござります」と反論するのだが、当時十七歳の宗十郎実子の沢村 者であった。その宗十郎が享和元年三月二十九日に、 **升顔見世』(寛政十一年刊)の八百蔵評では「訥子丈より評判よく** かきつばた」(『役者三組盃』 するように人気を分け合っていた。また、 政八年刊)では宗十郎と八百蔵と彦三郎が三人まとめて評されたり こすりということだが、八百蔵への期待を込めた発言でもあろう。 「やまけ」は「何とでも仰い。跡継ぎに源之助といふがあるからょ 「只今では訥子は亡くなりましたから、もふ橘屋よりほかに役者は くなり、 (寛政七年刊) では宗十郎と八百蔵と高麗蔵が、『役者御吉慶』 (寛 方、宗十郎も和事師として評価の高い役者であり、『役者時習講 やした。わつちは春道成寺のとき、花道で拾つた紙を守袋へ入 レておきやしたわな。いつそ贔屓だよ(『役者当評』寛政八年刊 [女中]中車さんだよ。黙つて見て居な。いつそ~~待ちかね 『役者宝船』にも死亡記事が掲載されている。『桃燈蔵』で 「されば訥子殿と中車殿いづれあやめか 宗十郎贔屓の「やまけ」に対するあて 寛政七年刊)と評されたり、 宗十郎と八百蔵はよく比べられる役 八百蔵と宗十郎がともに 四十九歳で亡 『役者三

曽我十郎の和事、 郎当座にて大評判の狂言ゆへ、追善として出し候処、又々此度も大 年三月、大坂中の芝居で「隅田春妓女容性」で梅の由兵衛を勤める このように宗十郎の芸が八百蔵に受け継がれた話題を意識しての 村宗十郎追善 この時の由兵衛を演じたのが八百蔵である。『役者宝船』にも「沢 当り大入なり」(『戯場年表』)というほどの評判であった。そして、 補むめのよし兵衛」が上演されているが、「此狂言七ヶ年以前宗十 たという。宗十郎追善狂言として享和元年四月興行の二番目にも「増 の由兵への男立」云々と梅の由兵衛の当たりが伝えられ、寛政十一 つてよふござりましたよ」とあったが、 桃燈蔵』 「梅の由兵へなどは上り以来の大当り」(『役者大功記』)であっ 寛政九年刊行の の発言であった。 『桃燈蔵』 市川八百蔵梅の由兵衛を相つとむ」と記されている。 瀬川氏相人に例の富本上るりの出来を始として梅 K 「去年梅の由兵衛などは宗十郎よりやアかへ 『役者渡初』 宗十郎評に 梅の由兵衛は宗十郎 「去春当桐座にて の当た

者の源之助の存在等々、女中たちの話題とするところの多くがきちで語られた役者の病気や死亡に関する情報、追善狂言の情報、後継以上、八百蔵と宗十郎にまつわる話題を追ってきたが、『桃燈蔵』

これ、『は登成』の区刊のように、ごに表立の所重な伝表れた情報の一つである。評判記に記された情報量はかくも多い。者であったことも評判記に見られたが、贔屓の質も評判記に込めらんと評判記には記されている。また、二役者が女中に人気の高い役

踏まえて、『桃燈蔵』には次のようにある。

踏まえて、『桃燈蔵』の趣向の一つとして、ごく最近の話題を意識さらに、『桃燈蔵』の趣向の一つとして、ごく最近の話題を意識さらに、『桃燈蔵』の趣向の一つとして、ごく最近の話題を意識さらに、『桃燈蔵』の趣向の一つとして、ごく最近の話題を意識さらに、『桃燈蔵』の趣向の一つとして、ごく最近の話題を意識

に致します。 [ら](略)雛助が死んだから此頃ア贔屓なしさ。おし付団

であろう。
であろう。
であろう。
であろう。

郎を話題にしているのは、このような最近の話題の一つとして意識的である。贔屓の役者が変わることはあろうが、あえて雛助と団十二年十一月、十二歳で七代目団十郎が十七歳の若さで亡くなり、翌寛政十二年十一月、十二歳で七代目団十郎が十七歳の若さで亡くなり、翌寛政十二年十一月、十二歳で七代目団十郎に致します」との発言に対また、「らむうぬ」の「おし付団十郎に致します」との発言に対また、「らむうぬ」の「おし付団十郎に致します」との発言に対

的に選択した結果だろう。

以下のように記される。

「らむうゐ」をからかった「よたれ」自身は三津五郎贔屓から荒五郎贔屓に変わったところで、ゑん結びの占いをしたところ市川荒五郎贔屓に変わったところで、ゑん結びの占いをしたところ市川荒五郎贔屓に変わったところで、ゑん結びの占いをしたところ市川荒五郎贔屓に変わったところで、ゑん結びの占いをしたところ市川荒五郎贔屓に変わったところで、ゑん結びの占いをしたところ市川荒五郎贔屓に変わったところで、ゑん結びの占いをしたところ市川荒五郎贔屓に変わったと言いる。

取立名題に乗せける相談行届きれば金を貸そうといふ、帳元金が出る事ゆへ承知して荒五郎を本北山先生、市川荒五郎を殊の外贔屓して荒五郎を名題に乗せ河原崎座にて無人の顔見世、金主なくして興行延引せし時、山河

また、「らむうゐ」の台詞に次のようにある。った。早速、その荒五郎に贔屓がついたということであろう。不明であるが、荒五郎は名題に上ったことで、注目の若手役者であこの事情が事実なのか、また、どの程度ちまたに知られていたか

しい。『桃燈蔵』ではお屋敷の奥様は着物にも道具類にも「菊」を菊之字町方御差止メ 依之誹名之路考ヲ名乗」という事情だったら考と改めている。『役者系図』によると「御上御誕生之御名ニ差合之丞事瀬川路考」とあるように、享和元年、「菊」の字を憚って路敷の奥様はきつひ御贔屓で召物にもお道具にもいつそ菊ばかり敷の奥様はきつひ御贔屓で召物にもお道具にもいつそ菊ばかり

付けていたといい、また、奥様は菊之丞に似ているといもいうが、

ここらもその時の事情を踏まえての発言であるのかもしれない。是

以上のように『桃燈蔵』では最近の歌舞伎界の話題を意識しなが近の話題であるだけに気になるところである。

話題として楽しめるところであったと思われる。ら、うわさ話として描いていく。歌舞伎ファンにとっては同時代の

ていくのだが、評判記には取り上げられない話題も出てくる。さて、このように役者をめぐっての話題は尽きることなく広がっ

[ゑひも] わつちらが方の太夫さんかへ。よくなる筈でございたりあるなど、いふことを詳しくはなす(略)〉

種の評判記であるが、歌右衛門評中に以下のような一文がある。者更紗眼鏡』(文政三年成立)は役者の内証はなしを記した変わりに関わる部分の情報についても芝居好きの話題であった。しかし、に関わる部分の情報についても芝居好きの話題であった。しかし、だとかいった日常の身持ちについて、役者の住まい、実名、家名、だとかいった日常の身持ちについて、役者の住まい、実名、家名、だとかいった日常の身持ちについて、役者の住まい、実名、家名、だとかいった日常の身持ちについて、役者の住まい、日頃から女のよう

いき気質の評ニ懸り升ふるに委しくは 殊に今日は芸評を致さぬ席故 内証はなしひの初めより江戸下りの狂言目録は浜松歌国の著述芝翫咄のつ[頭取]夫より座摩いなりの宮地を修行有て 大歌舞妓へ出勤

場面は次へと移る。

登場人物になるが、次のごとき結果であった。の設定が「忠臣蔵」を踏まえているため、家中の者は「忠臣蔵」のがあるが、これも歌舞伎文化の楽しみの一つの形であろう。『桃燈蔵』では女中たちが家中の者を役者に見立て、楽しむ場面

- 勘平→市川男女蔵
- 家老の子息→市川団三郎
- 九太夫→嵐三八か市川友蔵
- 定九郎→市川高麗蔵

享和元年には三月に中村座で、九月に河原崎座で「忠臣蔵」が上 演されているが、ともに勘平を演じたのは男女蔵であった。男女蔵 演されているが、ともに勘平を演じたのは男女蔵であった。男女蔵 の筆頭の役者、市川団蔵の子息、市川団三郎である。九太夫にあて られた嵐三八、市川友蔵は実悪の役者である。定九郎は高麗蔵とあ られた嵐三八、市川友蔵は実悪の役者である。定九郎は高麗蔵とあ るが、享和元年十一月、三代目市川高麗蔵が五代目松本幸四郎を襲 るが、享和元年十一月、三代目市川高麗蔵が五代目松本幸四郎を襲 るが、享和元年には三月に中村座で、九月に河原崎座で「忠臣蔵」が上 したところである。四代目の年齢、および「高麗屋」とも呼んでい とも呼んでい

歌舞伎ファンの楽しみの一つであった。の表れである。このようにまわりの人々を役者に見立て楽しむのもが、いかに贔屓であるのかを競い合う、贔屓争いもまたファン心理勘平は男女蔵か高麗蔵かと、贔屓争いに盛り上がる様子が描かれるあところから見ると、定九郎にあてたのは三代目の高麗蔵である。

る。

「以上のように、評判記の見どころ、評判記に書かれる情報、書か以上のように、評判記の見どころ、評判記に書かれる情報、そして、評判記を見ながら展開された芝居ばなし等々、別上のように、評判記の見どころ、評判記に書かれる情報、書かる。

四、役者評判記の評判

『桃燈蔵』のおもしろいところは、評判記を読みながら、評判記権厳蔵』のおもしろいところは、評判記を読みながら、評判記にやから面白くござりやせん。此絵のところが本の綴ぢ目でもある字でね。御座りますといふときに△〈三角〉なものだからかっぱり大帳にある通りの字でございます。前方と違つて悪口やつばり大帳にある通りの字でございます。前方と違つて悪口がねへから面白くござりやせん。此絵のところが本の綴ぢ目でがねへから面白くござりやせん。此絵のところが本の綴ぢ目でがおへからするところにもある。長くなるが以下に引いておく。 でもある字でね。御座りますといふときに△〈三角〉なものとからばり大帳にある通りの字でございます。前方と違つて悪口やつばり大帳にある通りの字でございます。前方と違つて思りながある。 だから作者も骨が折やす。

は「そりやア評判記にやアいつでもある字でね。御座りますといふまずは表記について、「いろは」は「ム升」が読めずにいるが、「ゑ」

ジャンルにおいても見られる字であるが、ここでは、評判記と台帳 うのであるが、確かに台帳にもよく使われる書き方である。ほかの にある通りの字でございます」と言う。台帳に使われる表記だとい ようと簡単に請け合っている。 目にかけやしやう」とあり、 が宿へまいつたらつくりの所で〈作者の事也〉正本をかりて来てお ないが、検討すべき情報であろう。ただし、「ゑひも」のせりふに「私 不明である。 作の内実、 落本作者の蘭奢亭主人は と歌舞伎作者の内、休みの作者が担当しているというのである。 たのか、わからないことが多い。しかし、 あまり多くなく、ことに江戸の巻についてはどのように作られてい 晃氏などに先行研究があるが、この頃の評判記作者に関する情報は の字遣いが同じであるという指摘が興味深い。上方については池山 して、続けて「こりやア休の作者のつくるものだからやつぱり大帳 ときに△〈三角〉 蜀山人門下で狂名橘香保留と称した」人物であるが、評判記制 あるいは、歌舞伎作者の動向を知り得る立場かどうかは したがって、 なものと升といふ字を書きます」と解説する。 「江戸飯田町の煙草商で、 この情報が事実であるのかどうかわから 歌舞伎作者のところで正本を借りて来 「休の作者のつくるもの」 通称三河屋弥平 洒 そ

てはなしにのつていふ〉ねへ 〈二丁町は座頭のことは影でも様付けに言ふ口癖になり市紅さんがとんだ舞台がやかましい。それも訥子さんほどでは

とからすると、作者は歌舞伎界とそう遠くないところにいた人物な芝居町の内部の習慣に通じているような書きぶりである。以上のこ「二丁町は座頭のことは影でも様付けに言ふ口癖」だからだとする。「ゑひも」は「市紅さん」、「訥子さん」とさん付けで話を続けるが、

当でないと感じて気を悪くする役者がいたであろうことは想像でき ぢ目で体がわれルと立もの、役者はやかましうござりますとさ」と の苦労を認めている。 が求められていたようで、「それだから作者も骨が折やす」と作者 き一丁の挿絵が用意されるが、 気づかなかった指摘であろう。評判記には基本的に一座ごとに見開 あるが、これも役者が評判記をどう見ていたかを知り得るおもしろ るが、挿絵について、 とについてもよく知られていない。位付や芸評の内容について、正 のように見ていたのであろうか。興味あるところであるが、このこ い情報である。芸のよしあしを記した評判記を、当の役者たちはど のかもしれないが、 評判記作者に関する話題がさらに続く。「此絵のところが本の綴 現在のところ歌舞伎界との関連は不明である。 「本の綴ぢ目で体がわれル」ことを厭うとは 綴じ目付近に描かれる役者への配慮

癖も読者にとっては関心あるところであったようである。ないということであろう。好評判の芸評とともに、役者に対する難くなったわけではないのだが、読んでいて楽しめるほどのものでは判記に「悪口」がないから面白くないという。実際は「悪口」がなまた、「前方と違つて悪口がねへから面白くござりやせん」と評

されない。やはり、珍しい情報提示なのであろう。 とは記る。一方、評判記に関わる情報については、「知れたこと」とは記年刊)などもあり、舞台に関する解説はあまり珍しくない情報である。一方、評判記に関わる情報についての知識の披露が続くが、「知れたことの後、「正面は本舞台三間に二重舞台といふは一段高くなるとされない。やはり、珍しい情報提示なのであろう。

ることは間違いあるまい。のかは今後の研究をまたなければならないが、検討すべき材料であむのが『桃燈蔵』であった。それが、事実をどの程度反映している者や読者の問題について、語ってくれる非常におもしろい内容を含

方を述べて終わる。 『桃燈蔵』「序幕」は四日の休日を得た「やまけ」の休日の過ごし

ん。どふせふ。〈と案じる〉羽左衛門、其翌日は木挽町。ヲヤそれでは一日、日が足りませ一日は堀の内様へ、一日はお船、また一日は堺町、あくる日が

を中にとって、宿入り時の楽しみの一つが芝居見物であるが、芝居好きの「やまけ」は、中村座、市村座、森田座と日替わりで劇場にでは宿入りの女中の楽しみとして、芝居見物が重視されていたここでは宿入りの女中の楽しみとして、芝居見物が重視されていたことを確認しておけばよいだろう。以上、女中の歌舞伎ファンのあいて、また、その作り方について、さまざまな問題を提示してくれいて、また、その作り方について、さまざまな問題を提示してくれいて、また、その作り方について、さまざまな問題を提示してくれいて、また、その作り方について、さまざまな問題を提示してくれいて、また、その作り方について、さまざまな問題を提示してくれいて、また、その作り方について、さまざまな問題を提示してくれいて、また、その作り方について、さまざまな問題を提示してくれいて、また、その作り方について、さまな思想を表示している。

注

氏解題参照。 (注1)『洒落本大成』第二十二巻(中央公論社、一九八四年)神保五彌

(2) (注1) に同じ。

(注3) 評判記の体裁の変遷については、池山晃氏「観客の視点 (一)

一九九八年)参照。 —役者評判記」『岩波講座 歌舞伎・文楽』第四巻(岩波書店、

- (注5)池山晃氏(注3)論文、「河内屋太助板の役者評判記」(『演劇研の字憚事あつて菊之丞は路考と改、菊之助は路之助と改」とある。りて菊之丞路考と改」と、『戯場年表』に「(享和元年) 二月菊(注4)『歌舞妓年代記』寛政十三年九月の記事に「此時より遠慮の事あ
- (注6) (注1) に同じ。

礼申し上げます。 などした。図版の転載を許可くださった名古屋市蓬左文庫に御〔付記〕 資料の引用にあたっては、適宜、漢字を当て、句読点を付す



幕末期の江戸における役者評判記

門が元禄十二年(一六九九)から刊行を始めた黒色表紙小型横本三 事は到底不可能であるとしても過言ではない。 ずつその内容は変質していった。八文字屋系役者評判記の変遷につ 出版の中断と再開、そして河内屋系以外の書肆の参入を経て、 れに代わって大坂の書肆河内屋太助の参入、さらに天保改革による として継続的に刊行されている。しかし、八文字屋自体の衰退、 者を変えながらも慶応二年(一八六六)という幕末まで定期刊行物 役者評判記」とする)である。八文字屋系役者評判記は、書肆や作 冊の役者評判記 記を用いるだけでは当時の江戸で活躍していた役者達の動向を追う っては江戸評の変化と情報量の減少が著しく、八文字屋系役者評判 いては池山晃氏による指摘があるが、とりわけ江戸時代末期にいた 者評判記」として最も代表的なものは、京都の書肆八文字屋八左衛 ある事は、この分野を志す者にとって誰もが認める事であろう。「役 役者評判記が歌舞伎研究、役者研究にとって欠かせない資料群で (以下、この形態をとる役者評判記を「八文字屋系

れており、それらを用いる事によって当時の江戸三座で活躍してい た役者達の評判を見ることができる。そこで本稿では、江戸末期の その一方で、八文字屋系役者評判記の江戸評衰退と相反するよう 江戸という地域では八文字屋系以外の役者評判記が多数刊行さ

> う点についても考察を加えてみたい。 していた役者評判記とは如何なるものであったのかを具体的に見て 記が終焉を迎えた翌年の慶応三年(一八六七)に江戸で刊行された いく。そして、当時の人々が役者評判記に何を求めていたのかとい 八文字屋系役者評判記の動向を踏まえた上で、八文字屋系役者評判 一枚摺の役者評判記を取り上げ、幕末期の江戸において人々が享受

倉

橋

正

恵

一、天保改革以後の八文字屋系役者評判記の動向

勘兵衛、 系書肆 の様々な書肆が相板という形で出版に参加する事となる。 屋太助の名前は役者評判記に見られなくなり、代わって他の河内屋 となる。そして天保改革による刊行の中断の後、版元としての河内 されるものの、八文字屋系役者評判記は八文字屋の手から離れる事 評判記の板株が移動する。その後作者八文舎自笑の名は形式的に残 していく八文字屋から大坂の書肆河内屋太助へと、八文字屋系役者 の間、八文字屋系役者評判記がどの様な状態であったかを確認する。 天保改革以前の文化八年(一八一一)の時点で、 (河内屋平助、 名古屋の金網屋米蔵、 天保改革後に出版が再開されてから終焉に至るまで 河内屋平七、河内屋藤兵衛)や京都の吉野屋 江戸の丁字屋平兵衛等といった各地 書肆として衰退

字屋から役者評判記の板株が渡った河内屋太助の動きと類似してい 同趣向の大坂の綿屋喜兵衛版役者見立番付と並び、 関する一枚摺も多数出版している。その中で代表的なものが、 として名前を連ねている。この吉野屋勘兵衛は、嘉永期以降役者に 政四年(一八五七)と万延二年(一八六一)を除いてほぼ毎年版元 四海波』から文久三年(一八六三)正月刊『役者日本鑑』まで、 所」として名前が挙がった後、嘉永六年(一八五三)正月刊 次いで翌五年(一八四八)正月刊『役者紫源氏』の二作品に 刊行が再開された弘化四年(一八四七)三月刊『役者五十三駅』、 野屋勘兵衛は、天保改革による中断を経て八文字屋系役者評判記の となる慶応二年正月刊の『役者金剛竸』を刊行している。一方の吉 株取得もこうした一連の動きの延長線上にあったと考えられる。 刊行物として定着していた。こうした吉野屋勘兵衛の動きは、 番付に形式を借りた役者の見立番付である。吉野屋版の見立番付は、 正月刊『役者外題競』、そして八文字屋系役者評判記としては最後 で文久四年 (一八六四) 内屋平七は、 系役者評判記の出版活動に参加していたと思われる 八文字屋系役者評判記に版元として名前を見出す事ができる。 この中でも特に河内屋平七、 河内屋太助は役者評判記へ参入する以前から、 吉野屋勘兵衛も河内屋太助と同様の意図によって、 さらには芝居関係の一枚摺を手がけており、 様々な書肆との相板による出版を繰り返した後、 正月『役者当世競』、 吉野屋勘兵衛の二書肆は、 元治二年 安政期以降定期 役者評判記の板 役者絵本や絵入 (一八六五 ほぼ毎年 八文字屋 「売捌 『役者 相撲 単独 八文 安 恐 河

系役者評判記に書肆として加わっている事も注目に値する。これらまた金網屋米蔵や金網屋伴七といった名古屋の書肆が、八文字屋

分を構成する形式に変化していく様子から見ても、 情報が増え、ついには名古屋巻とそれに付随する江戸の情報で一巻 巻の内一巻分を必ず江戸に割り当てていたものが、次第に名古屋の は考えにくい。ただ、八文字屋系役者評判記は従来より伝統的に三 ものも存在しているので、江戸での購買層を完全に無視していたと も江戸芝居に関しては評文を欠いたものが多く見受けられる。むろ あるものの、役者ごとの評文は連続して掲載されておらず、その後 傾向と平行して名古屋偏重に傾いたのではないだろうか。その証拠 名古屋の情報に比重を置いていたと言うよりは、むしろ江戸軽視 文字屋系役者評判記では、 向が評判記に表れた結果であると考えられる。だが、 来し、その途中である名古屋の芝居への出演回数も増えたという傾 は少しずつ増えてはいたが、 る。天保改革による刊行中断以前にも、 の動きは、 屋系評判記には名古屋に関する情報が格段に増えていく。 名古屋の書肆による参入を反映したためか、 屋重視という編集方針は顕著であると言えよう。 八五五)正月刊『役者正札附』の間は、江戸役者目録はかろうじて に、嘉永三年(一八五〇)正月刊『役者早料理』から安政二年 ん相板元として丁字屋平兵衛といった江戸の書肆が名を連ねている 江戸に関する情報が減少するのと相反しているとも言え 移動する役者の動きを追った結果として それは役者達が江戸と上方を頻繁に往 名古屋の芝居に関する情報 出版再開以降の八文字 江戸軽視、名古 江戸末期の八

評者、補助、校合者としてこの時期の八文字屋系役者評判記に名を(京都)、長丁舎・長々舎可様(名古屋)といった様々な人物が作者、坂)をはじめ、四文舎浪丸(大坂)、魁舎主人(江戸)、東山亭花楽坂)をはじめ、四文舎浪丸(大坂)、魁舎主人(江戸)、東山亭花楽坂)をはいるで、各年の作者も八文字屋自笑(大

であったのか、もしくは実際に評者として活動していたのかについ になったとある。 義三都倶々評者の見損じ多く何の為の評判記やら分らぬ様ニ成行 の異例とも言える披露口上が載っている。そこには「近来評判記之 巻末には新たに加わった評者「浪華の好者 事でもある。八文字屋系役者評判記のこうした不安定さが読者へも 字屋系役者評判記の評価活動についての世間の捉え方を示すと同時 ては現在定かではない。だがこの金多楼好成の口上は、 れば凡聞覚居候」である自分が、版元の求めに応じて筆を執ること る善悪を見覚へ候 又古い事なら百余年の昔の事迄も此道の事とあ 候」ため、 八五八)正月刊『役者初渡橋』から新しい評者が加わる。同書上巻 伝わり、次第に読者の不評を買い始めたのであろうか、安政五年(一 ねている。多数の人物が作者や評者として度々入れ替わるという 活動自体の質を改めて考えさせられるものと言えよう。 言い換えればそれだけ評価の基準や責任が曖昧になるという 「幼年より此道を好み是迄あらゆる名人達の致おかれた 作者や評者として名前が載る人物が名目上のもの 皇都在 金多楼好成 当時の八文

都子、 の作者は基本的に見受けられないのに対し、 れに随する人物達である。 までしている。また長々舎一門とも言うべき長々舎山鳥、長々舎三 はこの後も頻繁に作者や補助として現れ、 する長丁舎可様の名前が挙がっている。 月刊『役者智恵競』では「二代目長々舎可様」という様に代替わり 長々舎玉也、さらには「長々舎」を意識したと思われる長楽 (一八四八) 正月刊 『俳優紫源氏』 作者において最も気になるのは、 天保改革による中断以前には、 長丁舎(長々舎)可様の名 嘉永五年 (一八五二) 名古屋住の作者及びそ 刊行再開の翌年である からは、 「尾陽住 名古屋住 正 ح

せていった一因にもなったのではないだろうか。

せていった一因にもなったのではないだろうか。

さ可様、長生舎三伍、都庵可様といった人物までも出現する。これ会可様、長生舎三伍、都庵可様といった人物までも出現する。これ会可様、長生舎三伍、都庵可様といった人物までも出現する。これ会可様、長生舎三伍、都庵可様といった人物までも出現する。これ

居宮芝居惣役者大見立 雪月花』や翌四年正月『役者都名所』の作者の一人である長々舎ニ を号する者の名前が度々見受けられる。特に、安政三年正月 記とその周辺にあった役者を評価する様々な評判記において、 とも考えられるのである。幕末期以前からも、 役者見立番付や役者評判記は、 舎三都子は八文字屋系役者評判記での経験を活かし、一枚摺におい 都子は、 の役者見立番付や役者評判記では、撰者として「長々舎(蝶々舎) 在のところ未詳である。しかし、幕末期から明治初期の一枚摺形態 てはこうした特徴が著しいと言えよう。 伝統ある八文字屋系役者評判記と冊子形態を取らない ても評者として活動していたのであろう。つまり幕末期においては く同様の関係性が存在していたであろうが、 人物であった可能性も高く、 一年(一八六二) なお、長々舎の人々が如何なる人物であったのかについては、 綿屋喜兵衛から刊行された役者見立番付「三都大芝居浜芝 版で撰者として名前が挙がっている。 改名家号俳名細吟」の万延二年版と翌文久 そのために緊密な関係性を持っていた 評者が同グループの者、 とりわけ幕末期におい 八文字屋系役者評判 時には同 恐らく長々 枚物形態の 『役者 現

ところで、こうして揺れ続けていた作者も、安政六年(一八五九)

末期の八文字屋系役者評判記の傾向は、 戸芝居に関する情報は一切記載されていない。江戸軽視という江戸 屋系役者評判記の刊行となる。 慶応二年まで刊行され続ける事になる。しかし、明治維新を二年後 兵衛と近しい人物であった事は容易に想像できる。また、『役者名 世々の接木』の作者である事しか判明していないが、書肆吉野屋勘 を迎えたのである。 に控えて動揺が続く上方においては出版の継続が困難であったの 系役者評判記は一定の評価基準と安定を取り戻したのか、八年後の せよ、俳優堂夢遊を単独の評者として起用した事により、八文字屋 在」の金多楼好成と同一人物である可能性も考えられる。いずれに 先述の安政五年『役者初渡橋』の評者であった「浪華の好者 山尽』下巻巻末に「浪花好人平安住 俳優堂夢遊」とあることから、 吉野屋勘兵衛から安政五年秋以降に成立したと考えられる『俳優 大芝居浜芝居子供芝居 俳優堂夢遊については、 結局慶応二年正月に刊行された『役者金剛競』が最後の八文字 『役者名山尽』以降は俳優堂夢遊の一人に固定する事となる。 に吉野屋勘兵衛から刊行された一枚摺の役者見立番付「三都 惣役者大見立」 住まいが京都であること、 なお、この『役者金剛競』では、 の撰者であること、 最後まで払拭できずに終焉 安政七年 同じく 皇都 江

江戸における八文字屋系役者評判記以外の役者評判記

居評を記す『踊形容花竸』が挙げられる。『踊形容花竸』については、あろうか。まず冊子形態のものでは、安政元年には江戸三座での芝という地では如何にして役者の評判に対する渇きを癒していたのでさて、八文字屋系役者評判記が前述のような状況である時、江戸

役者評判記となる事はできなかった。

位者評判記となる事はできなかった。

で頓挫しており、八文字屋系役者評判記に代わる新しい定期刊行ので頓挫しており、八文字屋系役者評判記への不満を背景に刊行された役者評判記であった。ところが、当初十編までの刊行を予定し、その中で興記であった。ところが、当初十編までの刊行を予定し、その中で興記であった。ところが、当初十編までの刊行を予定し、その中で興記であった。

冊子形態の役者評判記とは対照的に、冊子形態以外の役者評判記がうかがえる。

その時々における役者に対する世間の人々の評判を採り上げたもの 役者評判記は不定期の刊行物であり、 者似顔、 目録の延長線上にあるものと言えよう。 戸定期刊行物として刊行していたものであり、 しての意味合いが特に強いことから、 この中において、 紋、 住所、 位付、 役者似顔給金付はある程度特定された版元が江 給金、 役者評といったもので役者名鑑と 形式、内容共に多様であるが 八文字屋系役者評判記の役者 他方の役者評判絵と一枚摺 記載される情報も役

富んだ内容になっている事が多いのも特徴の一つと言える。絵において表現するため、一枚摺役者評判記よりもさらに風刺性にである。役者評判絵においては、評判や歌舞伎界でのランク付けを

出版物の共通点の一つと捉える事ができよう。出版物の共通点の一つと捉える事ができよう。一番特徴的なものとしは、いくつかの共通点を見出す事ができる。一番特徴的なものとしは、いくつかの共通点を見出す事ができる。一番特徴的なものとしは、いくつかの共通点を見出す事ができる。一番特徴的なものとしば、いくつかの共通点を見出す事ができる。一番特徴的なものとしば、いくつかの共通点を見出す事ができる。一番特徴的なものとしば、いくつかの共通点を見出す事ができる。一番特徴的なものとしば、いくつかの共通点を見出す事ができる。一番特徴的なものとしば、いくつかの共通点を見出す事ができる。一番特徴的なものとしば、いくつかの共通点を見出す事ができる。一番特徴的なも別の意思を表している。

判記以外の役者評判記には、 に依拠する事なく役者個々人の芸評と世間での評価や評判を記す事 間に上演された芝居を振り返りながらの芸評ではなく、 うとしていたというよりも、むしろ享受する江戸の人々側の要望に 者評判記が意図的に八文字屋系役者評判記と異なるものを作りだそ との差別化を図ったとも考えられよう。 それを避けたとも考えられる。また、敢えて八文字屋系役者評判記 定の芝居に依拠した内容では類板として咎められる可能性があり、 如何に捉えるかは議論の余地があるところであると思われるが、 いう趣旨のものは一部の例外を除いて存在していない。 に重点を置いている事である。 さらに共通点を挙げると、 八文字屋系役者評判記の様に過去一年 特定の芝居についての評判を報じると 従って、これらの八文字屋系役者評 しかし、筆者はこれらの役 特定の芝居 この現象を 特

> 答えた結果、 その性質を考えてみたい。 役者評判記を一点採り上げ、 からである。そこで次節では、 形態以外の役者評判記は敢えてこうした方向性を選んだと思われる 評判記がそれを行っていなかった事などから考えて、こうした冊子 評を速報的に扱うことが可能であったにも関わらず、これらの役者 後にそれに代わるものが作られていない事、 いった冊子形態に比べて簡易な出版形態を利用して特定の芝居の芸 いる。というのも、 特定の芝居には依拠しないという形になったと考えて 前述の 『踊形容花競』の刊行が途中で頓挫した 具体的にその内容を見ていきながら、 最幕末の江戸で刊行された一枚摺の さらに錦絵や一枚摺と

三、「大江戸根元 三芝居役者評判記 慶応三丁卯年大新板位

ついては、本稿末尾に載せているので適宜参照されたい。
した役者を歌川派の似顔を用いて描いている。本図の書誌と翻刻に判記」とする)は、上部に二十七人の役者の評文、下部に上部で評者評判記
慶応三丁卯年大新板位附」〔図〕(以下、「三芝居役者評
とする)は、上部に二十七人の役者の評文、下部に上部で評
とする)は、上部に二十七人の役者の評文、下部に上部で評
とする)は、上部に二十七人の役者の評文、下部に上部で評
といるので適宜参照されたい。

立劇場蔵)や、慶応二年「善悪見立御鬮箱」(三世十返舎一九述、で役者を描く趣向は天保期から既に行われている。また本来文字だで役者を描く趣向は天保期から既に行われている。また本来文字だで後者を描く趣向は天保期から既に行われている。また本来文字だでというを描さ込むという趣向も、本はたちはがくやのさかもり)」(鯉鱗行者戯記、一鴬斎国周画、国図に先駆けて元治元年(一八六四)の「四拾八僻戯房酒盛(しじゆ図に先駆けて元治元年(一八六四)の「四拾八僻戯房酒盛(しじゆ者を描くせがくやのさかもり)」(鯉鱗行者と表記)

一英斎芳幾画、都立中央図書館東京誌料蔵)に見出す事ができる。
 一英斎芳幾画、都立中央図書館東京誌料蔵)に見出す事ができる。

推測できる。 詳の人であり、 に対する特別措置から見て、 別な感情が込められていたと考えられるからである。こうした家橘 村座の太夫元であった四代目市村家橘だけであり、 堂閑人の個人的な好みによるものではないかと思われる。というの のかという理由について本図には何も記されていないが、撰者四倍 所に市村座の紋である橘が描かれている。なぜ市村座の紋を選んだ いているにも関わらず、本来の顔見世番付で劇場の紋が置かれる場 も適当であると考えられる。また本図では表題に「三芝居」や はないちのうりだし)」、袋題の「三座役者評判記」と三種存在して 大江戸根元 三芝居役者評判記 慶応三丁卯年大新板位附」、上部中央の「東都花市売昇 本図の題としては、下部右端の「大江戸根元 三芝居役者評判記 本図上部の評文中で位付に「ほうび」が付されるのは、当時市 の評判をうたい、また袋にも中村、 本図が顔見世番付を強く意識して作成された事を考慮して なお、 また版元も記載されていない。作者、 四倍堂閑人、 撰者四倍堂閑人は家橘贔屓であったと 絵師の一二三斎主人は両者共に未 慶応三丁卯年大新板位附_ 市村、守田の三座の紋を描 その評価には特 版元共に未詳 (えどの が最 \equiv

がら、 事であり、また「高島」とは同年に没した四代目市川小団次の事で が、 や、 と言えよう。本図下部に描かれる二十七人の役者は、 給金付において前年にその役者が勤めた役柄を反映した姿を描きな いの方が強い様に感じられる。 いうよりは、単純に家橘自体を享受者に思い出させるという意味合 ある。そして、この家橘の評文でさえも、 「蝶仝孖梅菊」で家橘が演じた髪結濡髪の長五郎と引窓小僧長吉の たこの長吉長五郎」とは、前年の慶応二年四月市村座で上演された を見るかことし」とあるだけでそれ以上の言及はない。ここでの「ふ 月迄に江戸三座で上演された芝居での配役を反映している。ところ 斗兵衛」役の坂東太郎の四人以外は、全て慶応二年の正月から十一 行される前年の慶応二年に江戸三座へ出演していた役者である。そ なってからは、 無視する事はできない。特に八文字屋系役者評判記が刊行されなく では得られない様な情報が含まれている場合があり、 資料として用いるためには、 的な嗜好が反映されやすい。 い。先述の家橘の場合でも、「ふたこの長吉長五郎は高島の似かほ して顔だけが描かれながらもその役名が記されていない坂東喜知六 に役者評判記としての歴史も権威も持っていなかったためか、個人 である事が多い一枚摺役者評判記では、八文字屋系役者評判記の様 だがこれと同時に、一枚摺役者評判記には八文字屋系役者評判記 「三ふ」役の中村仲太郎、 本図評文中には各人が勤めた役の芸評が載っているわけではな 評文は役者自体の評判しか記さないというものと近い感覚で 江戸での役者の評判を探るためには欠かせない資料 従って、この時代の役者の評価を探る 適度な注意を要する資料とも言える。 「花沢主膳」役の二代目中村福助、 本図のこういった姿勢は、 前年の芝居を振り返ると 全て本図が刊 その有効性を 役者似顔

あろう。

他の一枚摺役者評判記や役者似顔給金付及び見立番付類と比較して いる。 当時の江戸の人々が本当に求めていた役者達の評判を記すものであ 出していた役者達を中心とした役者評判記であり、それはまさしく 大きく「東都花市売昇」とある様に、 みると、夫程突出した偏りがあるとは思えない。本図の上部中央に の好みを色濃く反映している部分があるとはいえ、 程度役者のランクを判断する事ができるのである。 に対して、 になって活躍していた役者ほど大きく、 るように、 また、 たのである。 つまり、 本図が顔見世番付を意識して作成されている事からもわか 下級役者や老功の部類に入る役者達は脇に追いやられて 本図上部の評文中で位付が高く、また当時の劇界で中心 本図では文字で書かれた評判を読まなくても、 本図は慶応三年春当時に売り かつ中央に描かれる。 本図を同時代の 前述の様に撰者 これ ある

江戸の人々が求めていた役者評判記

八文字屋系役者評判記の中の評文の様に、過去一年間の上演を振り間点を敢えて指摘するとすれば、八文字屋系役者評判記に載る役者時記での見立て評も、両者共に「この役者を端的に言い表すとすりも性質が似ていると思われる。本図の役者評判記での長文の評文よりも性質が似ていると思われる。本図の役者評判記での長文の評文よりも性質が似ていると思われる。本図の役者評判記での長文の評文よりも性質が似ていると思われる。本図の役者評判記での長文の評文よりも性質が似ていると思われる。本図の役者評判記での長文の評文とは、本図の見立て評も、両者共に「この役者を端的に言い表すとすればこういった役者である」という事を示すのみである。そこには、本図に書かれる役者の評判の中で、八文字屋系役者評判記との共和ばこういった役者である」という事を示すのみである。そこには、本図に書かれる役者の評判の中で、八文字屋系役者評判記との共和はこういった役者である」という事を示すのみである。そこには、本図に書かれる役者の評判の中で、八文字屋系役者評判記との共和はこういった。

事によってそれを再び自分の中に再構築するという楽しさよりも、 える。また本図が特定の芝居に依拠していないという事は、 は、 えながらそれらの情報をいかに面白おかしく伝えるかに重点を置い 受者が良く知っている役者とその周辺の情報を採り上げ、 に抱くものに非常に近い様に思われるのである。 幕末期の江戸においての役者に対する感覚は、現代の我々が芸能人 り沙汰して楽しむことの方が格段に多いであろう。江戸末期、 いての批評を行うより、 芸能人の噂話をする際、その芸能人が特定の芝居で見せた演技につ 近に感じさせてくれる楽しさの方が重要だったのである。現代でも それぞれの趣向を理解し、その上で役者及び芝居の世界を自分の身 簡易で短文ながら的を得た役者の評判を眺めたり読んだりしながら 来からの八文字屋系役者評判記上で行われていた舞台の記録を読む らの役者評判記を受け入れていた当時の江戸の人々にとっては、 ているのかといった事の方が大切であったのである。つまり、 に素質があるか、そして江戸歌舞伎界の中でどのランクに位置され た情報よりも、 る人々にとって役者が特定の芝居で行った演技の方法や衣装といっ が日常行い、また様々な形で享受し楽しんでいた感覚であったと言 ているのである。この様にある事物を別の事物に見立てて遊ぶ感覚 を細かく評価しようという姿勢は全く感じられない。それよりも享 返りながら芝居を紙上で再構築し、その上で各役者が持っている芸 何も八文字屋系役者評判記に限ったものではなく、 役者として如何に人気があるのか、 彼もしくは彼女の言動や世間での評判を取 役者として如何 当時の人々 趣向を加

あろうか。その答えとして、当時の芝居の上演とそれを取り巻く環それではなぜ、当時の江戸の人々はこういった感覚を好んだので

ものであり、 その度毎に役者の似顔を用いた役者絵が多数出版される。 事は紛れもない事実である。 鳥居派や勝川派の時代よりも遥に広くかつ深く庶民に浸透していた し、歌川派の役者絵が生活のあらゆるところに出現する事によって、 江戸末期という時代や、 特に歌舞伎文化が浸透していたのである。むろんこういう現象は、 た。つまり現代では想像もつかない程に、当時の生活には芸能文化 彼らの生活の大部分に何らかの形で役者や芝居の話題が登場してい 者を判断できるので全く支障がなかった。言い換えれば、江戸の人々 されるのは役名のみで役者名が記されない。ところがそれらを享受 人々にとって歌舞伎役者という存在は生活から絶対に切り離せない の生活のありとあらゆる場面で役者の図像を見る事ができ、そして 者絵本、さらには合巻の表紙に描かれる役者の姿など、江戸の人々 た見立絵や団扇絵、役者評判絵、見立番付、一枚摺役者評判記、 え劇場の焼失や経済難で芝居が上演されなくとも、役者の姿を描い にとってそれだけ役者が身近な存在であったのである。また、たと していた人々にとっては、自分達が普段から見慣れている似顔で役 による役者絵の禁止から文久元年 境について考えてみる必要がある。江戸三座で芝居が上演されれば、 同時に身近でありふれた存在ともなっていたのである。 上方にくらべて江戸では格段に多く役者絵が供給されていた また歌舞伎役者は彼らにとって憧れのスターでありな 江戸という地域に限った事ではない。しか その結果として、 (一八六一)頃まで、 それを享受していた 役者絵に記 天保改革

な支持者がつく。それは歌舞伎役者という職業において至って当たの時代においても、役者には必ず芸の善し悪しを度外視した盲目的加えて、幕末期は役者のファン層も特徴的であると言える。いつ

とめ

江戸末期の江戸においても、八文字屋系役者評判記の読者層は前江戸末期の江戸においったのであるう。また八文字屋系役節で触れた様な人々だけではなかったであろう。また八文字屋系役節で触れた様な人々だけではなかったであろう。また八文字屋系役の出版に江戸の書肆が関与していた八文字屋系役者評判記とはい。しかし、伝統的な形式と内容を最後まで維持しようと努めながらも江戸の扱いに関しては大きく変化していた八文字屋系役者評判記とは記が結局慶応二年に終焉を迎え、一方の八文字屋系役者評判記とは記が結局慶応二年に終焉を迎え、一方の八文字屋系役者評判記とは記が結局慶応二年に終焉を迎え、一方の八文字屋系役者評判記の読者層は前年の大方でも刊行されるようになり、さらには明治期になってみならず上方でも刊行されるようになり、さらには明治期になってみならず上方でも刊行されるようになり、さらには明治期になってみならず上方でも刊行されるようになり、さらには明治期になっても作られ続けていったのである。

であった。そのため従来の役者評判記研究では八文字屋系役者評判系役者評判記は形式、出版共に最も長期間安定していた役者評判記野郎評判記から始まった役者評判記の長い歴史の中で、八文字屋

徐々に逸脱していき、結果として明治を目前にしてその姿を消して 化を追う事が役者評判記全体の性質の変化を追う上でも最も重要と 役者評判記研究に新たな視点を見出す可能性を指摘できたと考えて しまったのではないだろうか。本稿で用いた例はほんの一例であり、 振り返る事に重点を置いてしまった八文字屋系役者評判記は、そこ でいる。しかし定期刊行物として定着し、一年の興行とその芸評を るものであろう。むろん、八文字屋系役者評判記もこの流れを汲ん る。こうした率直な欲求は、 朴な興味と世間での評判を記したいという単純な発想に基づいてい 在していた事に気付く。これらの役者評判記は、 物を俯瞰して見れば、多種多様な八文字屋系以外の役者評判記も存 されてきた。ところが少し視点をずらして、役者の評判を記す出版 記を中心に捉える事が必要であり、また八文字屋系役者評判記の変 しかも時代範囲が限定されているものであるが、少なくとも今後の へ固執するあまりに人々が求める役者評判記の本来の有りようから 野郎評判記から脈々と受け継がれてい 歌舞伎役者への素

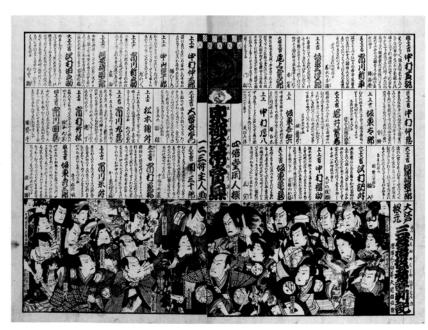
大江戸根元 三芝居役者評判記 慶応三丁卯年大新板位附

題:「大江戸根元 三芝居役者評判記 所蔵…立命館大学アート・リサーチセン 都花市売昇」、 (袋題) 「三座役者評判記 慶応三丁卯年大新板位附」、「東 タ 1 (登録番号

大きさ:縦四九・○センチ、横六六・○センチ

arcBK07-0022)°

刊記:慶応三丁卯年。 **匡郭:縦四三・三センチ、横六一・四センチ。**



〔図〕大江戸根元 三芝居役者評判記 慶応三丁卯年大新板位附

作者・絵師:四倍堂閑人撰、一二三斎主人画

版元:不明

備考:後人による赤インクの彩色あり。

横一三・○センチ)があり。袋には中村座、市村座、守田座の 裏に「TO KASHIOO」と墨書された袋(縦一八・八センチ、 紋が描かれる。

演された月及び劇場名を記す。 ※役者名下の ()の中は、本図下部に描かれている役名と、上

極上上吉 中村芝翫(大星由良之助・慶応二年八月中村座

両の直打はある 飾海老 の花やかさは桃勝栗の一座迄引たてる座頭かぶにらんだ眼ばかり千 にかざられ酒樽にのせられ上戸も下戸もやらずのがさす殊ニぶたい 貴人から下~~迄これを愛ずといふ事なき古今とつぼの愛嬌もの餅

真上上吉 市川新車(皃世御せん・慶応二年八月中村座

汲やうからつかひやうの古事来暦にくはしいはおそろ韓信又とはご んせぬしかしぶたいがはたらきすぎ赤味のすぎの手ぎれいさもだん (人よごれのできる 若水の手桶

上上吉 坂東三津五郎(近江のおかね・慶応二年八月守田座)

やまとなられる 太箸 がつほ御賞翫はなさる、か今一ト削りけづりあげたら風に柳の立お お名前はりつばなれど親御ゆつりのふツきらほうなれども江戸の花

大極上上吉 尾上菊次郎(加賀千代・慶応二年八月守田座

こやかな門松 ふ小松には旅中で枯られ御しうしやうはさる事ながら老ては益々す 野辺の松子に曳残り牛になりとはふるい狂句たが今は三都に葉をの した尾上の松の大太夫相に相生の連合も当春古木になられ杖とも思

上上半吉 中村仲太郎 (三ふ)

役に立はすこしの間あとは不用のものながら此ごろお名前もひろが 餅むしろ

中山現十郎(山名次郎左衛門・慶応二年八月中村座

ないが今なくてはことのかける だいくく おほきななりでをかしみたつぷりしかし大あぢでさしたるうまみは

上上半吉 市川新之助(大わし文吾・慶応二年七月市村座

二葉のうちに親木にわかれゆきしもにかんなんして名だいの中には 入るもの、これも壱人役に立かねる 裏白

上上半白吉 河原崎国太郎 (おかる・慶応二年七月市村座)

早咲の梅早咲の梅まなるまいしかし行々は一流の大木になられるかへツて花のためにもなるまいしかし行々は一流の大木になられる 介添の丹情で見事に花は咲せるもの、根が室咲ゆへあまりの重荷は

大上上吉 沢村田之助(うははみおよし・慶応二年正月中村座 とめまくるしいほどはづみすきる かゞり鞠 出来すぎるといふうはさながらできかねるにははるかまし五色きん かへけんぶつの目をよろこばせる当時一流の利ものしかし事による ぐへの艶なるから白糸ばかりのすごみまでくふうに手をかへしなを

(二段目)

白至上上吉 中村仲蔵(春藤げんば・慶応二年八月中村座

の手の強い 金網 手元に居る内は愛敬たツふり御改名座敷の御道具となりめつきり火 手まめな仕事は御持前の御上根業にかけたらへこみのない丈夫向勝

上上半白吉 坂東太郎 (五斗兵衛)

むかしは形もない事なから近年当気がりうかうゆへ切おとしは受が よいが上品むきには成かねる 鬱金木綿の財布

大上上吉

岩井紫若(薄雲太夫·慶応二年二月市村座

うれ口もどつとせずしかしおいへがらと申しきれいつしきふたいへ 税井のかたはくすれねど当時にはむきかねますそれゆへとしどくに でた計で直打があつていつまでも見さめはせぬ 破魔弓

坂東喜知六 ([顔のみで役なし])

とされたせへかすこし跡へ減かけた 摺古木味噌にも酒にもつかはれて評判のよいにつけさんせうの木のひ、り

上上 中村鴈八(偽迎ひ・慶応二年八月中村座)

からチョツトいきつへを立た 天びん棒中年ながらかるいこなしには重荷を捌てこられたがヒヨンな爪つき

大上上吉 大谷友右衛門 (飛騨内匠・慶応二年八月守田座)

されの 組続 やつし七くさなつななんてもこ□(※破れのため判読不明)れのこやつし七くさなつななんてもこ□(※破れのため武道たちうち所作事がたかいといふのて人気はすこしたちかねたが武道たちうち所作事京都のせ抜も三都をわたりた、きこんたるおうてまへもチト気ぐち

上上半吉 松本錦升 (千崎弥五郎・慶応二年八月中村座)

重宝なから壱人りてはいけぬ ゆづり葉 よいお名まへを御さうぞくてかゞみ餅から門かさり迄あれもこれも

上上吉 市川九蔵 (梅王丸・慶応二年八月中村座)

ねとつ、きりわきりのあら~~とした所は又あちのある。包丁の夏狂言に魚屋団七の評もよく千六本のこまかな仕うちはくひたら久しく刃かねもなまくらてあつたか近年めつきりきれたして鯉の洗

上上半吉 市村竹松(大星力弥・慶応二年七月市村座)

箱入そたちのだんなかぶやかて諸人にあかめらる、 蛭子大黒

功上上吉 市川団蔵 (時平公・慶応二年八月中村座)

すさす折目た、しい(俵熨斗)あぢのあるさすがむかしはならしたあはひしかし古れいは今なほくあだいかれすきてしくさにおっもしろみは厶り升ぬがかみしめると

(三段目

大上上吉 河原崎権十郎 (松右衛門・慶応二年十一月市村座)

にるゐなし急度三升の相続はできる 組入にはむきかねるがむかしのかたをくづさずしたいものかけたらほかにはむきかねるがむかしのかたをくづさずしたいものかけたらほか近頃人気はうすらぎましたがつかつて見ると重宝な立ものチト世話

半白大上上吉 沢村訥升(塩冶判官·慶応二年八月中村座)

御茶席には兎も角もお座敷向の上品もの入梅土用八専とこまかな仕

た第一に可役のきく 大小の柱掛 打は見へませぬが手ぎれいて重宝ものそれゆへめつきり売れ出し升

上上吉 中村福助 (花沢主膳)

座敷もの、極最上願はくはもう少し愛敬がほし、宝録のお福をも厶り升ぬが負た〳〵はせりふまはし五音にお気をつけられたら松本秋山の細工よりこまかな仕打はさすが上方御修行だけきりのあ

真上上吉 坂東亀蔵(加古川本蔵・慶応二年七月市村座)

かし場数の老功だけおも~~として直打のある。三宝の腹をゑぐられどさして目あたらしいといふしゆかうも見へ升ぬし黒ぬり高まきゑの手重きをはなれしら木春慶の生ぜわに毎度見ぶつ

真上上吉 関三十郎 (近江源五郎·慶応二年八月守田座)

合しかし市二日の二はんめに此品で一トばはもつ 十九日の簑う夫もこれも立かたきのとうしやうはいかすくないのて一入のお仕むかしからはつともせぬか相かはらす売てゆくのは年来の御きんこ

大上上吉 市村家橋(鷲の長吉・慶応二年二月市村座)ほうひ

女中のうれしかる おしゑの羽子板の長吉長五郎は高島の似かほを見るかことした、うつくしいのておねんか入て見功者に我ををらせるお江戸のめいふつ一ト子にふたこ殿様おく様の時代をすてりうかうに新手をきそひこまかなさいくに

上上吉 市川米升 (宿祢太郎・慶応二年八月中村座)

ぬ きりぬき凧いたつてちいさいかちうのりのはなれわさいのちにはいとめもつけ身のかるいのとしんきをうかつは師匠かしにせのゆつりものなりは

極上上吉 坂東彦三郎 (武智光秀・慶応二年十一月市村座)

く、すへに手のぬけてくる 注連 節というでは、おしむらくは上かはのはしまりにねんかいつてたんしらかふわかさりしんものからまへたれのしたいものまて申ふんは此品ものか出ぬうちは春になつたこ、ちもせぬ一座をあつかる座か

注

- 成八年)。 ―幕末・明治の名優たち―」展図録、たばこと塩の博物館、平―幕末・明治の名優たち―」展図録、たばこと塩の博物館、平(2)赤間亮「歌舞伎史から見た猿若町時代」(「浮世絵に見る歌舞伎
- 可様を「浪越」とする。(4)安政三年正月刊『役者雪月花』では長楽舎可様を「東都」、都庵
- (5)安政六年正月刊『役者砰言艸』では下巻の撰者を「梅月亭有蝶」万延二年正月刊『役者砰言艸』では「自笑述」の序文があり、
- 昭和五十一年復刻)。
 「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本の 日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本の 「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、「の日本のでは、
- 《りかん社、平成十一年》。 《りかん社、平成十一年》。 『江戸の文事』延廣真治編、
- 一番端であるために役名を入れる余地がなかったと推測できる(9)四人の内、坂東喜知六については彼の描かれている場所が左の

から。が、他の三人についてはなぜこの役名が選ばれたのかが未詳でが、他の三人についてはなぜこの役名が選ばれたのかが未詳で

一に末筆ながら御礼申し上げます。付記 図版掲載を快諾いただいた立命館大学アート・リサーチセンタ

市史編纂資料本の役者評判記

名古屋で作成されたものがあげられる。その名古屋評判記のなかに あり、そして、三都に次ぐ興行地である名古屋の興行を対象として しては、江戸で刊行されて江戸の興行のみを評判対象としたものが 行されていた八文字屋主導のものを主系列と考えるならば、 れらの性格は必ずしも一様ではない。三都を対象に、主に正月に刊 る)

はそれにあたる。 古屋市史編纂資料本」の役者評判記 の所在が明らかになったものもある。ここで紹介する、いわゆる「名 役者評判記という名のもとに網羅的な集成が図られているが、そ 現存が早くから知られるものもあるが、一方で近年になってそ (以下、単に「市史本」と称す 傍系と

伝本の経緯や意義について、推測を交えた部分もあるが、整理をし に活字化されている(後述) すでに旧稿でも言及し、その一部は『歌舞伎評判記集成』第二期 のであるが、この機会に「市史本」の

○市史本確認の経緯

編纂室が設けられて作業が開始されており、係員が各種の原資料か れる一群の資料がある。『名古屋市史』は、 名古屋市鶴舞中央図書館には、 「名古屋市史編纂資料」と総称さ 明治四十年八月に市史

ら筆写をおこなって作成したのがこれである。

池

山

晃

十二年のことであった。 とあるのを目にした。同図書館で当該資料を確認したのは、 屋芝居評番(ママ、資料自体における表記では「判」)記 などの八点の書名が見えている。ところが、それらと並んで「名古 小寺玉晁の著作として『尾張芝居雀』『古袖町勾欄記』『勾欄類見聞 項目)「演劇」(小項目)のなかに、名古屋の芸能記録を多く遺した (昭13・12)にまとめられたが、 これらの資料の一覧は『市立名古屋図書館郷土志料目録 その「諸芸」(大項目)「演芸」(中 第一 昭和六

作者名も記した)。 対象となる興行の年月と興行地。また、記載のあるものについては、 そこに収められていたのは、 次の八点である(括弧内は、

(一冊目)

- 延享三年八月 『役者二つ紋』(同年七月 七ツ寺 中笑・末笑)
- 延享四年二月 『役者出世の鉢木』(同年一月 七ツ寺
- 宝暦五年一月 『役者艶双子』(同年同月 清寿院·大須 井花·

三冊目

- 安永七年六月『役者百薬長』(同年同月 山王稲荷 白笑)
- 安永九年六月『役者馴染衣』(同年同月 山王稲荷 白笑)

(三冊目)

- · 天明元年六月『役者首尾吟』(同年同月 大須)
- 寛政七年冬頃『役者花手揃』(同年七~九月 大須)
- に重〉 文化二年七月『役者篇冠尽』(同年四月~六月 若宮 六~七月文化二年七月

までの四点が、当初から翻字対象となっている。そして今回の第三期の作業においては、『百薬長』から『花手揃』には『集成』別巻(平7・3)に補遺として収められたのである。点は『集成』第二期の収録対象となっていないことを確認したため、判記集成』第二期の収録対象となっていないことを確認したため、判記集成』第二期の収録対象となっている。

○市史本概要と伝本

市史本の体裁は、他の市史編纂資料と同じ原稿用箋(一丁の四周 本で、経に魚尾と「名古屋市史資料」)を用いて袋綴にしたもので、 表をうかがうことはできない。ただし、『篇冠尽』にのみ挿絵が三点、 表に写しとられて、綴じ込まれている。およそ一三糎×二二糎に およぶもので、縦横の比率は約三対五となる。通常の評判記と同様 に半丁全面を挿絵が占めたのならば、それとほぼ同じ比率の横本で あったと推測できる。

劇場の舞台を描いており、貴重な資料である。第一・二図は上方と[なお、この挿絵は、この時の評判対象であった若宮、大須の両

る。〕 第三図は、大須興行における「熊谷陣屋」の場面を描いたものであ 第三図は、大須興行における「熊谷陣屋」の場面を描いたものであ でいた様子がうかがわれ、歌舞伎享受史の好資料ととらえられる。 でいた様子が、の頃すでに、上方の贔屓連中を模倣して活動し 同様の顔見世座付の様子で、頭巾をかぶり拍子木を持った贔屓連中

八点のうち『出世の鉢木』の末尾に、

明治四十二年八月十八日 松本弥三郎原本ハ石田元季氏ノ所蔵ヲ謄写セシメ茲ニ一校ヲ為ス

れるので、複数の係員の目を通したことがわかる。 あ。なお、別人の筆跡もあり、誤脱を訂正している箇所も多くみら奥書があり、その時点で石田元季氏の所蔵本であったことが判明す年九月八日付、『馴染衣』には同年七月二十三日付で同人同趣旨のとあるほか、『艶双子』には同年七月二十八日付、『百薬長』には同

冒頭に「一方、『第一回「市史資料陳列目録』という資料が存在し、その「一方、『第一回」市史資料陳列目録』という資料が存在し、その

名古屋市役所 市史編纂係係の感謝措かざる所なり爰に謹みて出品者諸氏の好意を謝す係の感謝措かざる所なり爰に謹みて出品者諸氏の好意を謝す蒐集せるもの、外に新たに数百点の陳列品を見るに至りしは当史料探訪を始めてより凡一年幸いに有志諸彦の賛助を得て従来

本写本の別などについては記されていない。
中期もおおむね推測することができる。ただし、そこには書型、版本(石田本)が陳列されたことが確認できる(石田氏提供の資料は本(石田本)が陳列されたことが確認できる(石田氏提供の資料は本(石田本)が陳列されたことが確認できる(石田氏提供の資料は本写本の別などについては記されていない。

晃(号連城亭)の編んだ評判記目録である。玉晁の凡例には、さて、その石田氏自身が紹介しているのが、前掲の記録家小寺玉

朱にて外題をしるして右に同じ。府下評判記板行に成しは外題の肩に朱にて釣頭をなす、写本は

点に傍点を付して、判記を目録翻刻の際に末尾別掲とし、さらにそのうちの「写本」八判記を目録翻刻の際に末尾別掲とし、さらにそのうちの「写本」八石田氏が一点を追記する)。石田氏は右の凡例で弁別した名古屋評とあり、版本/写本、現存/未詳とりまぜ、十八点を記す(さらに

連城亭の旧蔵本にて今架蔵に帰せるものたり。

とするのである。

役者行々子 評判記写本ニテ出来

とあるが、玉晁はそれを入手していたわけである。

晁目録の後に、『花手揃』については、玉晁の目録には記載されていないが、玉

場始志によれば、天明三年の評判記なり。外に『花手揃』一冊あり。同じく玉晁の手沢本なり、続尾陽戯

七~九月の興行を対象とした評判記である。考証は誤っており、実際には、前掲のように『花手揃』は寛政七年うことになろうか。なお、対象とする興行についての『続始志』のと石田氏によって記されている。玉晁が目録作成後に入手したとい

天明二年の一連の稲荷芝居興行については、六月からの二の替を対象とした版本『役者三厭面』が備わっていた。石田氏所蔵の『行々対象とした版本『役者三厭面』が備わっていた。石田氏所蔵の『行々対象とした版本『役者三厭面』が備わっていた。石田氏所蔵の『行々対象とした版本『役者三厭面』が備わっていた。石田氏所蔵の『行々対象とした版本『役者三厭面』が備わっていた。石田氏所蔵の『行々対象とした版本『役者三厭面』が備わっていた。石田氏所蔵の『行々対象とした版本『役者三厭面』が備わっていた。石田氏所蔵の『行々対象とした版本『役者三厭面』が備わっていた。石田氏所蔵の『行々対象とした版本』が開いていては、六月からの二の替をであるとすれば、彼らが、個々の興行の詳細なレベルまで照準をあります。

できることになる。
「たの手に帰した名古屋評判記、しかも写本」という括りがひとまず氏の手に帰した名古屋評判記、しかも写本」という括りがひとまずの手を本評判記は、基本的性格として「小寺玉晁旧蔵で、石田元季

○評判記目録類の記載

であるが、これには市史本に関する記述は見当たらない。評判記目録として早いのは、生川春明『役者評判記古今題名通覧』ここで、評判記目録類における市史本の記載を確認しておきたい。

安田善次郎『役者評判記年表稿本』にも、この二点の記載がある。安田は参考にした書目として、生川、大惣、三木の各目録、青々園安田は参考にした書目として、生川、大惣、三木の各目録、青々園安田は参考にした書目として、生川、大惣、三木の各目録、青々園安田は参考にした書目として、生川、大惣、三木の各目録、青々園安田は参考にした書目として、生川、大惣、三木の各目録、青々園安田は参考にした書として、生川、大惣、三木の名目録、青々園安田は参考にした書として、生川、大惣、三木の名目録、青々園安田は参考にした。

ま『国書総目録』に立項されたという次第である。市史本のなかで『百薬長』『馴染衣』の二点だけが、所在不明のまづき、やはり二点のみ掲載するのが、『国書総目録』なのである。年表」(『歌舞伎序説』昭18・7所載)がある。そして、これにもと年表」(『歌舞伎序説』昭18・7所載)がある。そして、これにもとにあるのが、守随憲司「再訂役者評判記

○市史本の意義

結局、市史本の原本は所在不明となってしまった。市史編纂資料のなかには、原本の所在が不明のために貴重とされるものが少なくのなかには、原本の所在が不明のために貴重とされるものが少なくの多い名古屋の歌舞伎興行について具体的に記した資料が、このような経緯で生き延びた、という点はむろん第一の意義である(逆にでする)は、市史編纂資料に採用されなかったため、その内容も不明となってしまったのである)。そのうえでさらに検討を加えての多いだ。市史編纂資料に採用されなかったため、その内容ものが少なくのないには、原本の原本は所在不明となってしまった。市史編纂資料をいい。

したのか。『名古屋市史』のなかで歌舞伎に関する記述があるのは『風市史本八点は、名古屋市史編纂資料としてどのような役割を果た

う域を出ない。役者名に割書で位付を記す箇所もあるが、それは市 という表現は合致するが、これも雛助に対する常套の誉め言葉とい ついた例として、 末尾に一括掲載)において、 後劇界の衰微」「第六款 はできないのである。 されることもなく」と簡略な記述におさえられているのを覆すこと 算が大きい。『集成』の『三つ紋』解題で「『名古屋市史』には引用 史本の対象興行以外にも見られ、 にもとづいて演技評が詳述される、といった例は見られない。 者芝居評判記」 末尾に、 この節は約五十頁にわたってほぼ編年体で記述を行い、 俗編』(大4・8)の第四章「演芸」第二節「芝居」においてである。 参考文献を割書で記すかたちをとっている。しかし、 」が参考文献として挙がる 安永七年稲荷興行の嵐雛助に対する「当時の親玉」 明和享和期の演劇」(参考文献は第六款の 市史本の評文が直接引用される、 前掲の 「第五款 元文の禁令と其 『続始志』にもとづいた公 目に

『名古屋市史』に先行してパイロット版として刊行された『名古屋中史』(明治43・3)を参照すると、『市史』よりも記述が詳しいに関する記述)もあるが、やはり市史本の反映は認めがたい。結局、に関する記述)もあるが、やはり市史本の反映は認めがたい。結局、に関する記述)もあるが、やはり市史本の反映は認めがたい。結局、に関する記述)とも、記述量の配分、興行データ重視の方針といった事情からやむをえなかったのであろうが、玉晁の興行記録に比べると、市史編纂資料として充分に生かされたとは言い難いのである。では、「当地の劇評」としての意義はどうか、特に、「芸どころ」「芸では、「当地の劇評」としての意義はどうか、特に、「芸どころ」「芸という。

らず、この共通点が興味深い。芝居への関心は強いが、 事実についてはまめに書き留めながら、 ひかれたのであろう。もう一人の記録家、 劇家」のありようについては、 という方向へは発展していかないのである。このような名古屋の「好 演劇としてというよりも、 「すごい事」「えらい事」などの賛辞を連発している。ただしこれは、 ついて、いわゆる「見たまま」風の記述をしつつ、「おそろしい事 は仮名四谷怪談』を演じた際の仕掛に関するものである。 ひくのは、文政九年九月、清寿院芝居で三代目尾上菊五郎が『いろ 込んだ「劇評」はほとんど見られない。詳細な記述として特に目を にいう主系列の評判記を多数、 かし、玉晁自身の記録には、「大入」などといった記述以上に踏み ており、これらは現在早稲田大学中央図書館に収められている。し 玉晁はしばしば「好劇家」と呼ばれ、評判記に関しても、本稿冒頭 それらの仕掛の見世物的な要素の魅力に 別途の検討課題として考えたい。 および名古屋版のものを数点収集し 詳細な劇評はおこなってお 高力猿猴庵もまた興行の それが劇評 各場面に

市史本のさらなる意義を見出すとするなら、その内容よりもむしまねているのである。石田氏は前掲の名古屋評判記の目録にコメンまれているのである。石田氏は前掲の名古屋評判記の目録にコメンまねているのである。石田氏は前掲の名古屋評判記の目録にコメンまねているのである。石田氏は前掲の名古屋評判記の目録にコメンまねているのである。石田氏は前掲の名古屋評判記の目録にコメンまねているのである。石田氏は前掲の名古屋評判記の目録にコメンまれているのである。石田氏は前掲の名古屋評判記の目録にコメンまれているのである。石田氏は前掲の名古屋評判記の目録にコメンまれているのである。石田氏は前掲の名古屋評判記の目録にコメンまれているのである。石田氏は前掲の名古屋評判記の目録にコメンまれているのである。石田氏は前掲の名古屋評判記の目録にコメンまれているのである。石田氏は前掲の名古屋評判記の目録にコメンまれているのである。石田氏は前掲の名古屋評判記の目録にコメンまれているのである。石田氏は前掲の名古屋評判記の目録にコメンまれているのである。石田氏は前掲の名古屋評判記の目録にコメンまれている。

此等写本の多くは物好の人達が筆して廻覧せしもの、類なるべ

である。 形式の模倣というかたちでの執筆意欲をそそる存在であり続けたの時期にわたって、この土地の人にとっては、内容もさることながら、という。市史本の作者名からも推察できるが、延享から文化という

おさえておくべきなのであろう。
力を充分維持しえていた、という点は、市史本の存在を証左としてつて強調した。しかし、その一方で、主系列の評判記も魅力、吸引たちなりの形式の「評判記」を作ろうという方向性が現れた、とか江戸においては明和頃以降、文運東漸という気運を受けて、自分

の注である。 の注である。 それは、文政四年の評判記『役者甚考記』に載る名の記事である。それは、文政四年の評判記『役者甚考記』に載る名の記事である。それは、文政四年の評判記『役者甚考記』に載る名の記事である。

大坂江送られし旨右は大坂八文字屋(ママ)より需に応じて奥村先生これを撰で

に結実していくこととなったのである。する愛着や執筆意欲は、このようなかたちで変形、吸収され、新た古屋人が市史本などの名古屋評判記に込めてきた、役者評判記に対判記の作成に参入していたことが確認できる貴重な記述である。名この人物については未詳であるが、地元名古屋の人間が主系列の評

注

注2 http://www.city.nagoya.jp/shisei/ippan/siryokan/shishi/ に拠った。

注3 明治四十二年十一月七日付。陳列会場は未詳。

論考』昭4・11所収。
1号、大14・7。および(二)、同誌2号、大14・9。宝暦十三年までと明和元年以降で分載されている。後に『劇・近世文学年までと明和元年以降で分載されている。

とは考えにくい。注1拙稿参照。
興行のトピックがあったとはいえ、評判記の「刊行」に至った
興行のトピックがあったとはいえ、評判記の「刊行」に至った
とは考えにくい。注1拙稿参照。

注6 伊原青々園『役者評判記目録合本』(早稲田大学演劇博物館所蔵イ3―78)所収。この合本の構成は、①安田善次郎『役者評判記年表稿本』明治24・3に安田・三木・青々園各蔵本についてによる玉晁目録の前編のみ転写したもの、である。よって、③による玉晁目録後編所載の名古屋評判記は記載されていなには石田氏玉晁目録後編所載の名古屋評判記は記載されていない。

注7 柴田光彦『大惣蔵書目録と研究 本文篇』昭58・3に拠った。

注9 『名古屋市博物館資料叢書』3『猿猴庵の本』シリーズによる。注8 拙稿「文運東漸と役者評判記」『江戸の文事』平12・4。

- 29 -

明和期北信地方芸能の様相―『評判多質羅船』を中心に―

齊

藤

千

恵

はじめに

されつのある。
る地の地芝居の調査研究の歴史は決して浅くはないが、近年になり、

田(四種)の評判記の存在の報告をされた神田由築氏は、江戸の役者の地方巡業や、地方興行への影響力にも言及した。天明から寛政期に地方の舞台に出演した役者たちが、江戸の大芝居の芸を披露盛んに地方の舞台に出演した役者たちが、江戸の大芝居の芸を披露盛んに地方で上演したともいう。紹介された評判記は、明和六年『役者千字文』、明和七年『役者用文章』、安永八年『役者花見車』の三番千字文』、明和七年『役者用文章』、安永八年『役者花見車』の三十字文』、明和七年『役者用文章』、安永八年『役者花見車』の三十字文』、明和七年『役者用文章』、安永八年『役者花見車』の三十字文書である。

明らかにされている。三年の山口町の興行は、浄瑠璃狂言を中心としたものであることが三年の山口町の興行は、浄瑠璃狂言を中心としたものであることが山口については、尾崎千佳氏の報告があり、宝暦七年から宝暦十

棟におよび」、「主として千曲川流域(小県郡、北安曇郡)と天竜川録しているが、それによれば、長野県内の農村舞台は「約二百五十農村舞台の研究』では、当時残存していた農村舞台を丹念に調査記本稿が扱うのは、長野県北信地方の芸能についてである。『日本

を受けており、 を知る程度であったのが、これまでの研究の限界であったのではな でなく、村で行われた祭礼の記録となれば、 しにくいことはいうまでもない。甲府の例のように商業目的の興行 のあるなしに関わらず、常設舞台の建築が進む前段階の状況が把握 地方は、弘化四年(一八四七)の善光寺地震によって壊滅的な打撃 てなされた、とされる誤解をも生んできたのではなかろうか。北信 地芝居の隆盛が、文化・文政期以降、幕末から明治期に地方におい んであった地域を浮かび上がらせることはできるが、それによって、 ている。残存舞台の研究によって、幕末から明治期に地芝居がさか 神奈川などに匹敵する舞台群の所在として取り上げるべき」だとし の多さから、これらの農村舞台が、「岡山、兵庫、岐阜、群馬、愛知、 確認されていないようである。しかしながら、長野県下の残存舞台 のことであり、長野市内の善光寺門前、またその周辺に残存舞台は 上流域(上伊那郡・下伊那郡ほか)とに集中して分布して」いると かろうか。 る手だては乏しく、片々たる文書類・日記類から、その実施や演目 残存舞台の状況が掴みにくい地域である。 一層具体的な状況を知

域について、明和期末の祭礼狂言を含む諸芸能の存在を確認しうる今回とりあげる『評判多賀羅船』は、現在の長野市、善光寺平地

用文献名に触れずに引用した箇所のみを示す時は、すべて同書から の中で「本書」という場合は、すべて『評判多賀羅船』を指し、 報を伝えているものと判明したので、ここに報告する。以降、 氏の手配により、 の引用であることをお断りしておく ところ、明和期の北信地方の地芝居資料としては、非常に多くの情 中に本書は含まれておらず、 本の評判記である。最近になって、 資料である。 『歌舞伎評判記集成』第三期準備のためその内容を精査した 国文学研究資料館所蔵の複写物でしか確認できない書であ 本書は、旧抱谷文庫本のみにその所蔵が知られる、 明治大学附属図書館に移管されつつあるが、 依然その行方は不明とされている。 旧抱谷文庫本の多くは、 原道生 本稿 引 現 写

め になる。 はじめに書誌を記す。前段で記した通り原本所在不明本であるた 国文学研究資料館の複製写真から判明する内容のみを記すこと

判型 横15.5 cm程度。 写本一 影時のスケールを参考におおよその大きさを示すと、縦12㎝ ₩, 半紙二ツ切横本。正確な採寸は不能であるが、 撮

表紙 表紙色は不明。 しの間が剥がれていたものとみられる。 撮影時には表表紙・裏表紙とも、 表紙と見返

題簽 表紙に直接 「多賀羅ふね」とある。

内題 にも、 評判多賀羅船 **扉題風に「壬辰/評判多賀良ふね 全」とある。** (1丁表役者目録)、剥がれた表表紙見返し

> 成立 明和九年みつのへ辰の八月吉辰 明和九たつの中秋吉日 (奥付 (開口)

構成

①役者目録(1丁表~2丁裏 ②開口「不思議な縁から俄誹人思わず聞七福神の身の上噺

(3丁表~10丁表)

③評文(10丁裏~27丁裏

全27丁。匡郭・丁付等はないため、

実丁数で示した。

巻頭の目録こそないものの、それ以外については、三都刊行の役者 の特徴、本書から判明する地方芸能の特色等について報告する。 評判記のスタイルをほぼ踏襲した形式で記されている。以下、内容

『評判多賀羅船』の資料上の特性

とみてよいと思われる。梗概を次に記す。 っているであろうが、この評判記の性格を示す情報が記されている 前節で触れた、②開口の箇所には、フィクションの部分も勿論入

道修行の旅に出ようと盆頃に江戸を後にする。 きかじった程度の身では江戸の会席で通用するはずもなく、 間、にわか俳人として過ごそうとする。しかし役者の発句を聞 直で律儀者の男であったが、火事で焼かれた髪が伸びるまでの た市村座楽屋づとめの「あたまがちの万八」は、 明和九年 (※一七七二) 二月末の江戸大火で、葺屋町を追われ 名前に似ず正

雨のつづく中、しばらく姨捨近くに逗留することになる。雨も 頃は八月初旬、 白雨と名を改めた万八は、行き当たりばったりに、 伊香保を経て、碓井峠を越え、更級郡の姨捨辺りに着く。 歌枕にも詠まれた姨捨の月を見たいと思い、 上がず 沼

本うやく昨日から晴れ(※念願の月も拝めたので)、善光寺へため渡ることができない、小市の渡しへお回りください」と教ため渡ることができない、小市の渡しへお回りください」と教をいて変然の太鼓の音に驚き向こうをみれば、大勢の人たちが集まり、様子を聞けば祭礼の狂言が行われるとのこと。人を掻集まり、様子を聞けば祭礼の狂言が行われるとのこと。人を掻集まり、様子を聞けば祭礼の狂言が行われるとのこと。人を掻き分けて近づき、芝居を見れば、江戸三芝居にも劣らない趣向。 田舎にこうした名人もあるかと見とれているうちに千秋楽をむかえ、人々も帰って、残るは白雨一人。

かる。 じられ、 ごすことにするが、うとうととしているうちに、神殿より琵琶 れは役者の高下を記したもの」と夢のお告げに一巻の巻子を授 大出来であったこの土地の狂言を頭取となって評判せよ」と命 えた酒宴も果てようとする頃、 土地の産土神とともに祝っているのだった。七福神の愚痴を交 た。各福神は、 の音や明かりも漏れくるので、 ようと身支度をする。そこへ、老若男女士農工商が群がり来た 宿 白雨はあたりの山家で宿を乞うが、十八九里向こうの丹波島 へ行けと言われるばかり。山の手に見える灯火を当てにし 目覚めた白雨は、夢のお告げ通りに芝居好の人々を集め この場を評判所として芸品定をしようと述べ、評判を始 「三年以来の狂言は今見るごとく付け知らせよう。 深々とした神垣が現れた。仕方なくここで一夜を渦 昨日今日の祭礼が無事に終わったことを、 白雨は神々に見つかり「希代の 覗いてみると七福神の姿がみえ ح

後半部分は、神のお告げで集まった人々が評判所を構える、評判記

頭巾も、このころ江戸で流行した頭巾である。 頭巾も、このころ江戸で流行した頭巾である。 頭巾も、このころ江戸で流行した頭巾である。 の流行語であるし、開口文中の福禄寿の台詞にある、袖頭巾、山岡の流行語であるし、開口文中の福禄寿の台詞にある、袖頭巾、山町の流行語である。
の流行語であるし、開口文中の福禄寿の台詞にある、神頭巾、山町の流行語であるし、開口文中の福禄寿の台詞にある、神頭巾、山町の流行語であるし、開口文中の福禄寿の台詞にある、神頭巾、山町の流行語である。

(※福禄寿日)ながいあたまは一ばい風かしみるから いつぞ (開口)

においては、の扮装とされ、明和末頃の流行物の一つとみてよい。『辰巳之園』の扮装とされ、明和末頃の流行物の一つとみてよい。『辰巳之園』などでは半可通山岡頭巾は、明和七年刊『遊子方言』・『辰巳之園』などでは半可通

帯に、小短大小を、落指にさして、山岡頭巾を横丁にかむり、飛八丈の小袖の少しよごれたるに、黒繻子の袖口に、幅せまの女房]おはやう御帰りなさりやせ。 吶!!、 髪を大本多に結、[志厚]久しぶりだに、鳥渡参ろふかと思ひやす。[(※伊勢屋)

そふなも知らず、うかくくと来掛り、如雷が顔を見ると、 ろく顔にて、軸頭巾を 草履をはき、大小を閂指にさして(中略)大キなる鼻紙袋の落 かむり、 花色小袖に浅黄裏を付、 凄ひ男だ。[女房]まだぬしを知りなんせんか。如雷様とか云て、 日和下駄をはき、大キなる顔にて来る。[志厚]かみさん見ねて てヱ~~やかましのじや、ござりやせん。
ぁ艸の、御国衆とみへて、 郡内縞の給羽織に、 尻をぢん~~ばしよりにして、き木綿の足袋に、 貴公にわ、いづかたへお越なさる。 洗ひはげたる黄むくの下着、 海黄の裏を附、 袖頭巾をひらん 黒紗綾の きよ わら

れ、本書の「今はやる山おか」という記述と一致する。り後に流行した、明和末にまで見られるスタイルであったと考えら対し、半可通は山岡頭巾を被っている。山岡頭巾が袖頭巾の流行よのように、明和七年当時、御国衆までが袖頭巾をかぶっているのに

崂は、開口中にも評文中にも多々見受けられる。 江戸の芝居に通じていた人物が、本書執筆に関わったであろう痕

開口中には、万八が火事から逃れる時の記述として

やう~~新万屋が前まてはい行とも(開口) け出せど 双方よりやけくるけふりにまかれ一歩もうこかれずけ出せど 双方よりやけくるけふりにまかれ一歩もうこかれずとかくいのちが物たねなれば のがる、たけはにけのびんとか

詞として、『正学の名がみえる茶屋「新万屋三十郎」である。また、寿老神の台刊『古今覧』、安永五年刊『位芸名家□』、同年刊『歌舞妓三町伝』と、「新万屋」の名がみえるが、これは、芝居細見では、明和九年

はいふに及ばす 諸国都会の商ひ見せ 大のうれんにそめぬいゑひすやほていや大こくやさかい丁には弁天屋とて 三ヶの津

白雨が七福神の姿をみる際には

こはいかに 市村座の朝幕に毎日つとむる七ふく神の御すかた異相の人々しゆゑんのさい中いかなる人ぞとよく/ \見れは

うや~~しく居ならび玉ふ(開口)

の台詞として、 江戸の舞台を想起させて興味深い。例えば中村嘉平治評には、肴屋は戸の舞台を想起させて興味深い。例えば中村嘉平治評には、肴屋また評文の冒頭各所に、「ものづくし」の台詞が入っていることも、

に鯨鯢 と鰯 だよふこさりませう[頭取]御しやうはいとて魚つくしはみを つよみ の実悪も鯵をやられた 鰌のぬらつきなく ねとも つくしがあきれませう [肴屋日]王余魚の御祭礼狂言 烏賊さま近年めき/〜と鮹のやうにはやい上達 ことし 難を申鯖せりふの泳がわるいから 気を付られ鱈鮒は まだ朝の海月から 初鱖ののぼるやうにおし鰷/ 此人の手づよい仕うちでねむ鯛目も鮫まする 鰭のある大魚の出立鮠には鮸ぐ〜によい 競事鱭魚何でも鯣 年々鱒々魴鮄から誰鯉といわ 悪はね鱘い鱐の 見見

しの台詞が述べられる。市川末松評には「ほうかふりした男」が出とある。嵐文太評では果物づくしの台詞が、山下藤太評には薬づく

あげておく(図1)。 の上巻絵表紙に、それに近い扮装が描かれているので、一例としての上巻絵表紙に、それに近い扮装が描かれているので、一例として宝暦七年二月五日市村座「中村助五郎 魚づくしにてほめことば、 会調ばかりでなく、て、「松づくし」の台詞をいう。これなどは、台詞ばかりでなく、

評文中から知ることができる。 また、この人物が評判記の内容を熟知していた人であったことも、

下寨太平) すれは瀬川路考は若女がたのおやだまなりとこざりました(山すれは瀬川路考は若女がたのおやだまなりとこざりました(山二三年いぜんの江戸の評判記に市川三升を世こぞつて親玉と称

[上方もの]上方女形の名人松島兵太郎年よつて舞台をやめてに、「イヨ二代の希者女形のおや玉」とあるのと一致する。という記述は、明和七年正月刊『役者不老紋』江戸巻瀬川菊之丞評という記述は、明和七年正月刊『役者不老紋』江戸巻瀬川菊之丞評



図1 宝暦七年二月五日市村座「中村助五郎 魚づくしにてほめことば」上巻絵表紙 (東京都立中央図書館加賀文庫蔵)

の大評判(坂東定五郎評) にして出ました 元が女がたの上手ゆへ仕うちは大出来京大坂白あやの小袖しらがのさげがみしらあやのはち巻をさげむすひらあやの小袖しらがのさげがみしらあやのはち巻をさげむすひにして出ました 四五年いぜん姫小松の狂言に惣座中からたのまれ

うの役をせらる、人三ヶ津になし 当春此座にて姫小松子日の遊の浄るり狂言出るに付、無量の役とある記述は、宝暦八年三月『役者将棋経』大坂巻松島兵太郎評に、

からこの情報を得ていたことも考えられる。装など評判記の記述以外の情報も含んでおり、筆者が、別の情報源たっているのは記憶違いでもあろうか。この無量の記事などは、衣とあるものと一致をみる。実際の上演と「四五年以前」が大きく隔

また、芳沢久治郎評に

りてのしうたん[いきすぎもの]あれは路考定花がおび引のや「人の妹夫のむかいに行をうらやみ帯にとり付うちかけにすが

をあるのは、宝暦九年正月中村座「初買和田宴」の二番目浄瑠璃とあるのは、宝暦九年正月中村座「初買和田宴」の二番目浄瑠璃とあるのは、宝暦九年正月中村座「初買和田宴」の二番目浄瑠璃とあるのは、宝暦九年正月中村座「初買和田宴」の二番目浄瑠璃とあるのは、宝暦九年正月中村座「初買和田宴」の二番目浄瑠璃とあるのは、宝暦九年正月中村座「初買和田宴」の二番目浄瑠璃とあるのは、宝暦九年正月中村座「初買和田宴」の二番目浄瑠璃とあるのは、宝暦九年正月中村座「初買和田宴」の二番目浄瑠璃とあるのは、宝暦九年正月中村座「初買和田宴」の二番目浄瑠璃とあるのは、宝暦九年正月中村座「初買和田宴」の二番目浄瑠璃とあるのは、宝暦九年正月中村座「初買和田宴」の二番目浄瑠璃とあるのは、宝暦九年正月中村座「初買和田宴」の二番目浄瑠璃とあるのは、宝暦九年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、1000年には、100

頻出する。 ある。他にも、 代目中村助五郎にも受け継がれた著名な演技であるし、後者は、二 村磯五郎評)などである。前者は、二代目大谷広次と、初代中村助 触れる箇所もある。例えば「十町魚楽ははたかの角力であてとをし たへせぬはおさなどふしも恋心」とあるのを踏まえた記述である。 に「そも~~神代の其むかし鳥がおしゑしいもせごと今の代までも 二立目に演じられた長唄所作事 とあるのは、 代目市川団十郎・四代目市川団十郎の両者の演技を踏まえるもので 五郎の寛延二年の演技に始まり、両者の没後は三代目大谷広次・一 た」(山下藤太評)、「関羽が五関をやふりしは市川家のかほみせ」(中 長期にわたって繰り返し演じられた江戸の演技について、 明和七年正月市村座上演「富士雪會稽曽我」 江戸役者を中心として、三都の役者に擬える箇所は 「末待誓言葉」 の詞章の冒頭箇所 の一番目

者の目で見た地芝居のあり様として、興味深い記述を残すのである。 与があったことを窺わせる。本書の評文は、 こうした各所の表現からも、本書に江戸の芝居に精通した者の関 江戸の芝居をよく知る

役者見立、浄瑠璃見立について

一節①の役者目録には、 冒頭に

り込まれている。例外は多少あるが、登場する一人の役者につき、

まとめたのが表1、表2である。場合によっては、評文中に役者名 最低一人の江戸役者、作品名一つを用いていることになる。それを 評には「此人か当座の関取千両幟」

ることがわかる。「忠太」については、評文中にも「親玉」と表現

四代目市川団十郎を想定していることがわかる。次行の見立

」のように、必ず浄瑠璃名題が折

に寄する左のことし 苗字は江戸役者似寄の芸に寄する 見立は近年新上瑠璃の外題

とある (図2参照)

太」の下に記される小書きを合わせて読むと、「市川団十」となり、 |忠太」という役者を、江戸の大立者「市川団十郎」に見立ててい 図2のうち、例えば冒頭の「市川忠太」であれば、「苗字」と、「忠

については、

役者目録に登載がなく、

評文のみに立項されるため、

表中「大谷藤左衛門 「部立」に「評文」と

「役者見立」「浄瑠璃見立」ともに記述がない。評文の内容と位置か

示して役者目録の記述とは区別した。なお、 作品名が入ることもあり、それについては、

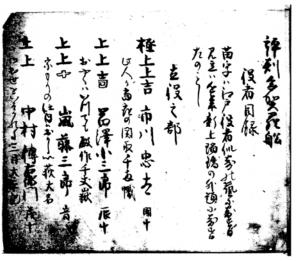


図 2 『評判多賀羅船』 1丁表役者目録冒頭部分 マイクロフィルムによる)

(抱谷文庫旧蔵、国文学研究資料館)

西きく蔵」についても同じ扱いとした。ため、「なし」と表記した。評文中にのみ記載される「代々太夫」「大ら、実悪敵役の部に入る役者であるが、表中見立欄は埋められない

が本書の成立時期と前後する役者などの場合は、 の人物が、 にあげた神田由築氏論文の注16で示されたごとく、地方において別 見立になっておらず「其侭」と記されているが、これなどは、 た時期より若干下がるものであろう。表中「吾妻藤蔵」については れた部分があると考えられる。厳密に言えば、 本書の役者目録については、 した三箇所には、安永元年十一月以降の役者名乗りが見受けられる。 たものである。 の表記など、 報をも盛り込んだ。「役者見立備考」には、 役者名の内、 本的に利用された役者の名乗り時期をあげたが、評文中に登場する きる場合は複数の数字を挙げた。「見立役者名乗時期等」には、基 数字は役者の代数を示す。血縁者・師弟などの複数の役者が想定で 想定できる役者名を、「利用役者」項にあげた。「利用役者」項の丸 小書きの表記通りの記述であり、苗字と小書き名の組み合わせから 表中「役者見立」項にあげたものは、 た可能性を示しており、 一で確認した刊記では まずは表1の、役者見立および、評文中の役者名から見てみたい。 大芝居で活躍した役者の名をそのまま名乗ることがあっ 主として評文中に登場する役者名に関して備考を付し 上演の特定ができる内容を伴ったものや、改名の時期 表1の中で、 「辰の八月」「たつの中秋」などとあるが、 興味深い 一部について、これ以降に書き加えら 「見立役者名乗時期等」の欄に▲で示 『評判多賀羅船』役者目録中 『評判多賀羅船』 成立は刊記で示され 名乗時期以外の情 本文中 注 1

浄瑠璃見立、および評文中に登場する浄瑠璃については、表2の

時の情報を、「江戸上演」項に、江戸の上演が確認できるか否かを 外題が存在するからである。参考として、「浄瑠璃初演」項に初演 する浄瑠璃名題等について、「浄瑠璃等名題」に記した。この項目 演通りの題名となっておらず、 だと思われる作品が挙げられているといえよう。 伎の外題については、 においては、 り得たことを確認しておく。 えないが、 日知られていないだけ、 また、江戸の興行記録自体の不足から、 瑠璃評判記によって、 本の形でもたらされたものもあろうし、この当時盛んに出された浄 ものと、上演が確認できないものとがある。しかしながら、 を備考として添えた。浄瑠璃については、 考」項には、主として評文中に登場する演目について、その表現等 に「等」を付したのは、評文の一部に歌舞伎を想定したと思われる 等演目(見立)表記」項に、表記通りの記載を残し、そこから判明 きないものが半数余りを占めるが、 示した。両項目とも、『義太夫年表』を参考とした。「浄瑠璃見立備 ようにまとめられる。『評判多賀羅船』 何らかの手段により、 明和期の極最近のものが多く、 明和期以前のものも多く、 題名を知ることのできたものもあるだろう。 ということも考えられる。 強いて特徴をあげるとすれば、 省略も多くみられるので、 本書の筆者が新浄瑠璃の外題を知 評文中に登場する浄瑠璃・歌舞 の外題表記は、必ずしも上 実際には上演があったが今 江戸で上演が認められる 江戸での上演も確認で 筆者自身が親しん 情報源は特定し 浄瑠璃 浄瑠璃

上演記録としての「評判多賀羅船」

間の上演記録が認められる。第一節③の評文中から読み取ることの開口部に示される通り、本書には、明和九年秋から遡って、三年

悪敵	実悪敵役	実悪敵役	評文	評文	立役	立役	立役	立役	立 役	立役	評 文	評文	立 役	開口	部立
川 与	中島伊蔵	坂田源之助	あらし文太	らし文	あらし文太	川億之	中村勝次郎	中村伝右衛門	嵐藤 三郎	富沢小三郎	市川忠太	市川忠太	市川忠太		役者名
判 五郎	三甫蔵	半五	梅幸	市村家橘	五	滝蔵	勝五	茂十	音八	辰 十	古人するが おしまるが	中山由男	団 十	坂東平久	役者見立
川 判 五 郎	②中島三甫蔵	②坂田半五郎	上菊五	市村羽	②嵐三五郎	川滝	中村	①中村茂十郎	②嵐音八	①富沢辰十郎	②大谷広次	①中山文七	④市 川団 中郎	①坂東三八	利用役者
明和7年11月~)→藤川明和7年まの(明和7年11月~)→藤川	明和元年11月~天明3年度。	寛延2年11月~天明2年5月。	享保15年11月~天明3年12月。	曆12年8月~天明5年8月	~安永6年9月迄江戸出勤。 元文4年冬~寛政9年正月。明和7年11月	永元年11月~天明6年江	暦 6 ~	座を中心に出勤、時には中村座へも。▲安永元年11月~安永6年江戸出勤。森田	は明和7年11月。 じます」とあり。嵐彦吉から音八への改名 評文中に「此程までの彦吉今の音八とぞん	元文五年11月~安永6年8月19日没。元文3年江戸下り。辰十郎を名乗るのは、	寛延元年11月~宝曆7年6月没。	寛延元年11月~天明2年9月。	関わりなくその後も名乗り続けたものか。市川忠太を名乗っでおり、江戸の改名とは市川忠太を名乗っでおり、江戸の改名とはが用いられていると判断した。改名以前よりは、江戸の団十郎は五代目が名乗っておりは、江戸の団十郎は五代目が名乗っており宝暦4年11月~明和7年度。明和九年に宝暦4年11月~明和7年度。明和九年に	た。 年正月	見立役者名乗時期等
		あり。破のばん左衛門」のような大悪を待ち望む声破のばん左衛門」のような大悪を待ち望む声評文中に「亀山染の水右衛門」「物ぐさの不	もあり。	に							太郎のやつし」を求める評文もある。王」「文七風の忠臣講釈の十太郎」「物くさ町」に例えられる箇所もあり、「十丁風の鬼	文中には「中山由男」「古人する		開口本文中に「坂東平久が朝いな」とある。	役者見立備考

13 12	12K Ym 7.1	と新己工	利用安全	左安旨名兵寺期	文 新 見 <u>万</u> 崩 等
台	後者々	花才見ご	利用 名者	を守ら一人相	在市里工作者
				演じた。二代目名乗時期は宝暦13	
				和3年10月。襲名時の宝暦13年11月	
				2年2月(この時は濡髪・放駒の	
)、明和7年11月に相撲場を演じた	
				年以外は股野五郎役である。	
花女形	久 治	之助	沢崎	和元年11月~安永7	
評文	沢		瀬川	6年11月~安永2年	「路考定花がおび引のやつし」と
評文	芳沢久治郎	定花	①市川八百蔵	寛延2年~宝暦9年10月没。	」の二番目浄瑠璃「鴬宿梅妻戸。上演は、宝暦九年正月中村座
花女形	中村磯五郎	松江	①中村松江	年 11	
				代目は宝永元年7月~	
				1は宝暦4年11月~明和7年度。二代	
				は、元文2年、元文4年、寛保2年、宝暦	
				に関羽を演じた。	文中に「関羽が五関をやふりしは市川
				年11月中村座に篠塚役で、四代目は	せ」とあり。明和七年十一月には
評文	中村磯五郎	市川家	②④市川団十郎	11月に岡崎悪四郎役で五	いるが
				これらの狂言に取材したとみ	破を上演していないため、二代目
				が、二代目の七回忌追善草双紙	解
				破』として刊行もされてい	
				会例会にて既発表、本書	
				を用意している	
	t 能 ī.	=		生没は正徳4年~明和8年3月29日。宝暦	評文中に「今はやる富士田流の長うた」とあ
許文	中村磯王良	富士 日	包含土田吉沙	和期の長唄の名手。	り。
花女形	佐野川羽助	市松	②佐野川市松	年11月~	
F C	子 	Ľ.	H	没は正徳4年~	といい
哲文	佐野川羽助	横江	包含土田吉沙	唄の名手。	和七年正
					「末待誓
花女形	森田末松	又治郎	①森田又治郎	宝暦12~安永5年10月。	
花女形	瀬川佐左衛門	吉次	③瀬川吉次	10月。明和元年初舞台。明和7年11月~天明5年	
				代は、中村喜代三郎弟、享保19年~寛	中に「お名
評文	瀬川佐左衛門	中村松兵衛	①②中村松兵衛	12月没。生涯女形で通したが芸の	中村松兵衛と
				代三郎には及ばなか	がた」とあり。

評文	評文	花女形		部立
大西きく蔵	代々太夫	あつま藤蔵		役者名
[なし]	[なし]	其侭		役者見立
	1	②吾妻藤蔵		利用役者
		享保15年~安永5年4月11日没。	位は上上白吉に上り、座本にもなった。寛位は上上白吉に上り、座本にもなった。寛位は上上白吉に上り、座本にもなった。寛位は上上白吉に上り、座本にもなった。寛には過ず、いはんや女形においてをや、人には過ず、いはんや女形においてをや、人には過ず、いはんや女形においてをや、人には過ず、いはんや女形においてをや、人には過ず、いはんや女形においてをや、人には過ず、いはんや女形においてをや、人には過ず、いはんや女形においてをや、中兵へと付しはまれ也。あら木与次兵へ、中兵にはなった。寛には、座本にもなった。寛	見立役者名乗時期等
助」評文のみに記載。よって役者見立なし。	「代々太夫」「大西きく蔵」は「坂田源之			役者見立備考

りがあり、

はの。 明和九年の興行について、本文中からわかるところをひろって述べられるのは、当該年度である明和九年の上演についてのみであられる程度で、残念ながらそれ以上の記述はほとんどない。詳細に明和七、八年の芝居に関しては、主な配役が判明し、短評が述べ

には祭礼時に狂言を出すのが例年のことになっていたことが伺わ「此里例年の御祭礼狂言」(市川忠太評)とあることから、この時

し、産土神が「すゝばなの竜神」に雨を止ませるよう依頼するくだら、上演月は旧暦の八月であることがわかる。また、祭礼狂言に際忠太評にも「来八月を待まするは千年と存じまする」とあることかれ、開口で白雨が姨捨に逗留したのが「南呂はしめつかた」、市川

目をおとろかす両日の大出来かんしんいたしました(開口) 上座のおゑびすにこく\と御亭主にむかい玉ひて まづ両日と 上座のおゑびすにこく\と御亭主にむかい玉ひて まづ両日と 上座のおゑびすにこく\と御亭主にむかい玉ひて まづ両日と

表 2 浄瑠璃等演目利用一覧表

			「染模様妹背門松」	染模様	市川十治郎	花 親 車 仁 形
	(歌)明和四年二月十二日 市村座(浄)明和三、四年。	明和三年十月十六日 大坂竹本座	「太平記忠臣講釈」	忠臣講釈	中村嘉平治	実悪敵役
		明和七年九月十九日 大坂豊竹座	「源平鵯鳥越」	鵯鳥越	山中左治兵衛	実悪敵役
		明和四年正月 京四条西石垣芝居	「石川五右衛門一代噺」	石川五右衛門一代噺	宮崎嘉右衛門	実悪敵役
見立なし。 様。よって浄瑠璃 村。なって浄瑠璃				[なし]	大谷藤左衛門	評文
	I	芝居 竹本春吉座 大坂道頓堀亀谷	「利生の池水」	利生の池水	沢村茂兵衛	実悪敵役
		市ノ側芝居 豊竹此吉座 明和五年十二月二十一日 大坂北堀江	「紙子仕立両面鑑」	紙子仕立	坂東万吉	実悪敵役
		大坂	「近江源氏先陣館」	先陣館	藤川与右衛門	実悪敵役
	(浄)明和末~安永初	座 明和七年八月十一日 京扇谷和歌太夫	「小田館双生日記」	**子日記	中島伊蔵	実悪敵役
大悪を待ち望む声 大悪を待ち望む声	(歌)明和五年五月七日 中村座(浄)宝暦十三年八月 土佐座	寬延二年十一月四日 大坂豊竹座	「物ぐさ太郎」	物ぐさ	坂田源之助	評文
が水右衛門 「物評文中に「亀山染	(浄)明和七年四月十九日 肥前座	明和七年四月十九日 江戸肥前座	「往昔模様亀山染」	亀山染	坂田源之助	評文
		明和八年十二月 大坂竹本座	「桜御殿五十三駅」	桜御殿	坂田源之助	実悪敵役
		明和三年正月十四日 大坂竹本座	「本朝廿四孝」	本朝廿四孝	あらし文太	立役
	(浄)明和七年八月一日 外記座	明和七年八月一日 江戸外記座	「けいせい扇富士」	扇の富士	市川億之助	立役
	(浄)明和八年正月二十日 肥前座	明和八年正月二十日 江戸肥前座	「弓勢智勇湊」	智勇湊	中村勝次郎	立役
	1	明和四年十二月十四日 大坂竹本座	三日太平記」	三月太平記	中村伝右衛門	立役
	1	明和七年八月十六日 大坂竹本座	「萩大名傾城敵討」	萩大名	嵐藤三郎	立役
		明和六年八月一日 大坂竹本座	「殿作千丈嶽」	殿作千丈嶽	富沢小三郎	立役
がある。	(歌)明和五年五月七日 中村座(浄)宝暦十三年八月 土佐座	寛延二年十一月四日 大坂豊竹座	「物ぐさ太郎」	物くさ太郎	市川忠太	評文
くさ太郎のやつ 物			[曽我もの]	鬼王	市川忠太	評文
「文七風の忠臣講	(歌)明和四年二月十二日 市村座(浄)明和三、四年。	明和三年十月十六日 大坂竹本座	「太平記忠臣講釈」	忠臣講釈	市川忠太	評文
	二月	明和四年八月吉日 大坂竹本座	「関取千両幟」	関取千両幟	市川忠太	立役
浄瑠璃見立備考	江戸上演	浄瑠璃初演	浄瑠璃等名題	浄瑠璃等演目(見立)	役者名	部立

l						
西きく藤」は評文のみに記載。よって浄瑠璃見立な				[なし]	大西きく蔵	評文
「代々太夫」「大				[なし]	代々太夫	評文
		前 豊竹島吉座 大坂阿弥陀池門	「傾城浪花をだ巻」	浪花のおだ巻	あつま藤蔵	花女形
	(浄)明和六年三月十六日 肥前座	明和六年三月十六日 江戸肥前座	「蝦夷錦振袖雛形」	振袖雛形	瀬川佐左衛門	花女形
		明和八年十二月二十八日 大坂豊竹座	「嗚呼忠臣楠氏旗」	楠氏旗	森田末松	花女形
		明和八年五月二十三日 大坂豊竹座	「角額嫉蛇柳」	角額	佐野川羽助	花女形
		明和八年正月二十八日 大坂竹本座	「妹背山婦女庭訓」	妹背山	中村磯五郎	花女形
	(浄)明和七年正月十六日 外記座	明和七年正月十六日 江戸外記座	「神霊矢口渡」	矢口の渡	芳沢久治郎	花女形
	(浄)明和六年七月十九日 肥前座	明和六年七月十九日 江戸肥前座	「時代世話女節用」	女節用	山下藤太	花女形
い」とあり。	(歌)延享四年五月~多数興行有。	延享三年八月二十一日 大坂竹本座	「菅原伝授手習鑑」	[なし]	坂東定五郎	評文
が母も河内のかく 評文中に「おかる	(歌)寛延二年二月~多数興行有。	寛延元年八月十四日 大坂竹本座	「仮名手本忠臣蔵」	[なし]	坂東定五郎	評文
	(浄)明和七年四月十九日 肥前座	明和七年四月十九日 江戸肥前座	「往昔模様亀山染」	往昔模様	坂東定五郎	花 親 仁 形
浄瑠璃見立備考	江戸上演	浄瑠璃初演	浄瑠璃等名題	浄瑠璃等演目(見立)	役者名	部立

以上の記述から、上演日は十日、十一日の二日間である。稽古につ これに呼応するように、実際の天候は次の通りであった。 当月初より霖雨にてよもやと存た所に した (市川忠太評) 止て両日ともに快晴首尾よく相すみ 又十二日よりふり出しま 九日のはん方よりふり

当年は御けいこもわづか六日の間にこれほどの大狂言の出来ま したは 三ヶの津の名人共はかくべつ 素人芸では当国はおろ か他国にもござるまい(市川忠太評)

いては、

とあることから、買芝居や旅芝居の一座の記録ではなく、その土地 とあり、六日で仕上げたとされる。この引用文中に、「素人芸では」

> の住民による素人芝居であったと考えられる。演者は、表3に掲出 した二十七名であり、

唯今当所の祭礼わかいものとものおどり狂言希代の大出来(開

П

と、若者が中心であったことがわかる。さらに、若女形巻頭の山下 藤太評には、 すに此人は北むき参りの厄年には二三年も間のある身ぶんで女 女形は四十を越ねばふりそでのこんたんはうつらぬものと申ま がたの大たてものおと、しの典侍のつほねはまだはたちそこ

とあり、厄年はここでは数えで二十五歳を指すものであろうし、一 らであの大でき (山下藤太評)

表 3 評文中から読み取ることのできる演目・配役一覧表

部 立	役者名	明和九「姫小松子日の遊」配役	明和八配役	明和七「義経千本桜」配役	配役備考
立役	市川忠太	俊寛僧都の家来亀王丸	濡髮長五郎	新中納言知盛、佐藤忠信	忠信配役は山下藤太評にあり。
立役	富沢小三郎	小松の内府重盛		義経	
立役	郎	大将宗盛、			
立役	中村伝右衛門	平判官康頼			
立役	中村勝次郎	斉藤治、だくぼくの江吉本名山田の二郎			
立役	市川億之助	丹波の少将なりつね			
立役	あらし文太	丹左衛門尉基康、三味線	山崎与五郎	主馬の小金五	
実悪敵役	坂田源之助	都、捕手、浄瑠璃	放駒の長吉	いがみの権太、横川の覚範	覚範配役は山下藤太評にあり。
実悪敵役	中島伊蔵	平相国清盛、がけのとう六本名字野の七郎		左大将とも方	
実悪敵役	藤川与右衛門	門番の貫兵衛、長井の大部			
実悪敵设	坂東 万吉	難波の二郎つね遠、なめらの兵実はしゆめ			
, i]	の判官もり久			
実悪敵役	沢村茂兵衛	せのをの十郎			
評文	大谷藤左衛門	深山の喜蔵本名越中の二郎兵衛盛嗣			
実悪敵役	宮崎嘉右衛門	盗人			
実悪敵役	山中左治兵衛	盗人			
実悪敵役	中村嘉平治	寛の家来有王丸	駕篭の甚兵衛	武蔵坊弁慶	
花 東 仁 形	市川十治郎	次郎九郎	山崎浄閑	鮓屋弥左衛門	
花 親車 仁形	坂東定五郎	無量	濡髮母	弥左衛門女房	
花女形	山下藤太	亀王女房お安	傾城みやこ	典侍の局、静御前、狐忠信	
花女形	芳沢久治郎	小松殿の簾中園生の方、俊寛妻あづまや			
花女形	中村磯五郎	盛の政	~		
		1			

18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

21 20 19

	部立	役者名	明和九「姫小松子日の遊」配役	明和八配役	明和七「義経千本桜」配役	配役備考
22	花女形	佐野川羽助	将惟盛、三味線将惟盛、三味線	おとら		
23	花女形	森田末松	おやすがむすめ小べん本名徳寿丸		す実は安徳天皇まづなの銀平がむすめおや	
24	花女形	瀬川佐左衛門	小督の局			
25	花女形	あつま藤蔵	鶴の前、熊野御前	ふじやあつま		
26	評文	代々太夫	浄瑠璃(三段目切)			坂田源之助評にあり。
27	評文	大西きく蔵	三味線(三段目切)			坂田源之助評にあり。

者とされる役者もいたことがわかる。 正確な年齢が割り出せることになる。ここから、二十歳過ぎで大立 昨年に二十そこらであったとされることから、役者中で唯一、ほぼ

上演の演目は、先にも触れているが、

とあるとおり、明和九年には「姫小松子日の遊」の上演があった。 は 委ク申さすとても各様御そんしの事ゆへ 芸評をおもとい 今度は大坂竹本座上瑠璃姫小松子の日の遊正本の通りてこざれ たして狂言の筋は申ませぬ(開口)

さらに、

御くろうでござりまする(中村磯五郎評) りまして残念 大序より二ノ切まて幕毎に出きつての御つとめ (※時子、常磐御前、 四段目道行をいたされますかと待ましたが短日ゆへか残 松の前の)三やくの内常磐御前は大出来

出 三ノ口あつまやがたい夜のとむらひ(中略)三ノ切長もちより 来現はじめその外のもの共に出あい小弁をかこひふるへら

> る、思ひ入(中略)大詰夫とあり王しあいの所へ出て引わけや うすをかたり しゆんくわんに引合するまて三段目は此人で持 まする (山下藤太評)

もわかる。 などの記述からは、大序から三段目切までの通し狂言であったこと

上演地は、白雨が祭礼狂言に出くわす際の記述として、 と人のおしへにしたがいて だんの原とかやいふ河原にさし し (開口) はきせんくんじゆ蟻のことく 様子をきけば祭礼の狂言あるよ か、れは 耳をつきぬくやぐら太鼓の音におとろき向ふを見れ に 市村の渡し船は水出てとをらず 小市の渡しへまわられよ (※姨捨から)善光寺へ参詣せんと宿を出 道を尋て行ところ

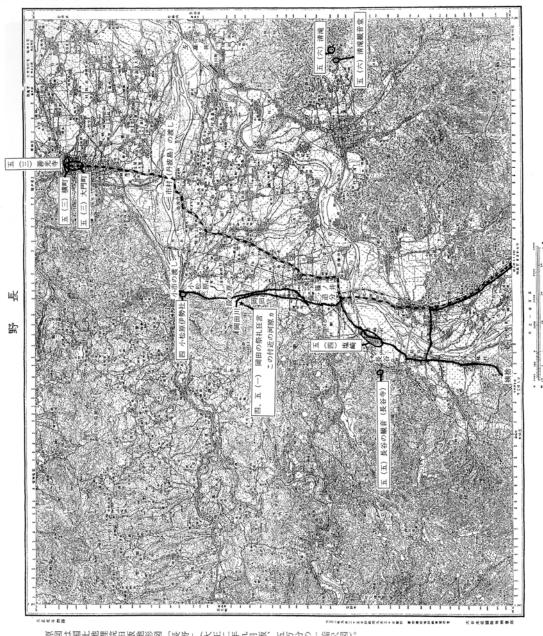
とある。嘉永二年刊『善光寺道名所図会』には、 塩崎を立つて平久保村 (中略)を越えて篠の井追分に至り、立

丹波島宿へ二里六丁、本街道なり。この茶店にて人の罵るを聞

石の柳屋に憩ふ(いなり山よりこの所まで三十丁)。これより

- 44 -

図3 『評判多賀羅船』「開口」白雨の足取りと、本文中に登場する芸能地



必要な地名は齊藤が適宜補った。原図は国土地理院旧版地形図「長野」(大正二年九月版、五万分の一縮尺図)。

----- …通常の江戸から善光寺への道程

(漢数字は本文中の章段に対応する) ・・・・『評判多賀羅船』に登場する芸能関係地



図 4 現在の小松原伊勢社社殿 (2007.8.22筆者撮影)

る。 信玄陣の跡あり)・段の原・小松原等を経て小市の渡しに出づ市の渡しといふ。(中略))。篠の井より小市へ廻るには、二ツ柳・市の渡しといふ。(中略))。篠の井より小市へ廻るには、二ツ柳・にても止まるなり。その時は十八丁川上に小舟の渡しあり、小けば川支なり、小市へまはるべいといふ(丹波島の渡口は中水けば川支なり、小市へまはるべいといふ(丹波島の渡口は中水

鼓の音に出くわしたことになる。(図3参照)。白雨はその道中の段の原あたりで、祭礼狂言の太た(図3参照)。白雨はその道中の段の原あたりで、祭礼狂言の太道であったが、それが使えない際には、小市の渡しへ廻る道があっとある。善光寺へ行くには、市村(丹波島)の渡しを使うのが本街

神に出会うことになる。 祭神は本文中には明記されていない。開口中には「産土神」「御事に出会うことになる。 狂言が終わると、あたりの山家に宿かに見ゆるをあてどにしてわけ行見れは いとしん/ たる神垣なかに見ゆるをあてどにしてわけ行見れは いとしん/ たる神垣なかに見ゆるをあてどにしてわけ行見れは いとしん/ たる神垣なかに見ゆるをあてどにしてわけ行見れは いとしん/ たる神垣ながに見ゆるをあてどにしてわけ行見れは いとしん/ たる神垣ながに見ゆるをあてどいない。 第二中には「産土神」「御神に出会うことになる。

として、場所であったことは確かであろう。開口文中には、長谷観音の台詞方角不明)とあるところであるから、「段の原」からほど遠くない上演地は、「段の原」から、太鼓の音を聞きつけた「向こう」(※

られぬ(開口) れど 一日見物したならあとがくたひれやうと思いやまして参岡田の祭礼もいかふよいとわかい同名どもかはなしで聞ていた

びとするのが定型であるが、本書の結びには、とある。また、評判記の本文末では、その芝居座の繁栄を寿いで結

て八束穂の 畑も岡田も豊年にて 五穀成就の蔵入は 千倍万半の後にはたねをまき 万歳楽には稲穂の実入 穂に穂さかへ

倍万々倍

納まる秋こそ目出たけれ

会の場所は篠ノ井追分から小市の渡しに通じる街道筋に近く、見物な厚く布施五明・岡田・布施高田・上氷鉋の四か村は田遊祭・神敬は厚く布施五明・岡田・布施高田・上氷鉋の四か村は田遊祭・神宮貢献祭・新嘗祭と称して大祭典神楽式を行ってきた」とあり、小宮貢献祭・新嘗祭と称して大祭典神楽式を行ってきた」とあり、小宮貢献祭・新嘗祭と称して大祭典神楽式を行ってきた」とあり、小宮京献祭・新嘗祭と称して大祭典神楽式を行ってきた」とあり、小宮京献祭・新嘗祭と称して大祭典神楽式を行ってきた」とあり、小宮京献祭・新嘗祭と称して大祭典神楽式を行ってきた」とあり、小宮京献祭・新嘗祭と称して大祭典神楽式を行ってきた」とあり、小宮京献祭・新賞祭と称して大祭典神楽式を行ってきた」とあり、小宮京献祭・新賞祭と称して大祭典神楽式を行ってきた」とあり、小宮京献祭・新賞祭と称して大祭典神楽式を行ってきた」とあり、小宮京献祭・新賞祭と称して大祭典神楽式を行ってきた」とあり、小宮京献祭・新賞祭と称して大祭典神楽式を行ってきた」とあり、小宮京献祭・新賞祭と称して大祭典神楽式を行ってきる場所に、仮設の舞台が設営された、と考えておく。

録がなされているかを見てゆきたい。和九年の岡田の祭礼の「姫小松」上演を中心に、どのような興行記わたって記述があるのも本書の特徴である。次節では、この地の明とあるにもかかわらず、芝居の内容や演出について、かなり細部に先の引用文中に、「正本の通り」であるから「狂言の筋は申ませぬ」

五、「評判多賀羅船」にみられる明和期の地方芸能

それぞれについて、どのような記録がなされているかみてみる。なされるとともに、周辺地域の諸芸についても言及がなされている。本書においては、この土地の「姫小松子日の遊」の記録が詳細に

(一) 岡田の祭礼芝居「姫小松子日の遊」について

つはいでこさりました(市川忠太評) 「おいでこさりました(市川忠太評) 「七間四面の大ふたい一塀の上にたつた一人居られましたれど」 七間四面の大ふたい一いたちまちかわりますると「親さい藤治かくびを口にくわへいたちまず、舞台機構について示されている箇所を挙げる。

ら確認できる。 「大仕掛大道具立」の舞台が、七間四方の舞台であったことがここか ではないが、七間四方の舞台であったことがここか ではないが、とのような機構を持って大道具を変

一般の観客席は青天井であったとみられるが、また、祭礼日の晴れを祈る様子が開口中に述べられることから、

内かお名をき、たい(坂田源之助評) ざつた さても身のかるい軽業師のしそふな事 おやくしやのぶらせるとてたれかはしらずぶたいの上の丸竹を渡つた人かご此所の道具立のきばの氷柱の冬気色見事であつた 殊さら雪を

道具の立派であった様子が窺われる。 丸竹が渡されていたことがわかる。この三段目切の場面からも、大とあるところから、舞台上には、雪を降らせる演出上の理由からか、

ち 人目もはぢぬ大よだれ(佐野川羽助評) おぼこな仕うちのおもしろさに 南北の桟敷にまします羅漢た

ともわかる。 という表現もあり、形状は不明ながらも桟敷席が設けられていたこ

選技や衣装・道具についても記述が豊富になされている。 あづまや四十九日の逮夜にふうふにてゑかうし 娘小べんに水 むけさする心付 こまかな仕内は本文の外 御くふうおどろき 事であろうと思ひの外柩のふたにそまつならうそく立きついお 心付 水向も麁相なこしおれ茶わんもりものも重箱とは何から でかん心いたした 相手は名にあふ藤太とのなればそのは づの事ながら 御両所ともに真実で致されまするから狂言とは 思われませぬ(市川忠太評)

正本にもない事を思ひ付たはかん心/ (山下藤太評) とからそばへ行 [見功者] ひさくにてかける間も心せき 水ばなからそばへ行 [見功者] ひさくにてかける間も心せき 水ばばへ行そふな所を 手を洗ひかたにかけたる手ぬくひニてふきばへ行をが思わず源氏の運のひらけ時といふを聞てかけ来り直にそ

については、演者が工夫して台詞や動作を付けていたものであろう。 あげな 何へかけても御きようでこさります(坂田源之助評)のように記されることから、道具や演技、かつら、衣装に至るまで、のように記されることから、道具や演技、かつら、衣装に至るまで、のように記されることから、道具や演技、かつら、衣装に至るまで、のように記されることから、道具や演技、かつら、衣装に至るまで、のように記されることがの思ひ付衣装のもやうも皆此人のさいくでござ

上るりもたび/\おつとめ御くろうにぞんじます(坂田源之助方で、演者が浄瑠璃・三味線を兼任していた様子も記されている。っ、その部立てをある程度守って演じていたことがわかるが、そのまた、配役については、表3をみると、それぞれが得意分野を持

ります(佐野川羽助評) 扨三味せんはこの四月からの御出情じやが我のおれた事でござ

ろう。その披露の場が、祭礼狂言の場なのである。日間だけではなく、日頃から芸を磨く努力はなされていたものであ佐野川羽助評に「この四月からの御出精」とあるように、稽古の六

対する批判も見受けられる。見た場合、その場にそぐわない演技に対する批判や、言葉の誤読に見た場合、その場にそぐわない演技に対する批判や、言葉の誤読にまた、田舎芝居ならではともいえようが、原作浄瑠璃の解釈から

太評)
太評)
太子のしったん。殊に忠臣無双の亀王か身でこしかた行すへ思ひやる程うれいになんきのかさなるなれば。おどけ所へはゆかぬやる程うれいになんきのかさなるなれば。おどけ所へはゆかぬいる程うれいになんきのかさなるなれば。おどけ所へはゆかぬいる程うれいになんきのかさなるなれば。おどけ所へはゆかぬいる程うれいになんきのかさなるなれば。おどけ所へはゆかぬいるませんためでござろうけれ共見物では請取かねます(市川忠さませんためでござろうけれ共見物では請取かねます(市川忠立ながらいとまでしてがくやへ入ながら馬の真似をなされたがすめませぬ。此時してがくやへ入ながら馬の真似をなされたがすめませんだいなからいとまでしている。

をもつてのおどけ事つまりませぬ(中略)御尤な難評 見物を小督の局りんさんの時味噌をするとてすりばちを打わり摺子木

失念いたした 頭取閉口~~(大谷藤左衛門評) とは天地懸隔の心持ちがい 此義は先ほとにも私が申べき所を申もの しゆんくわんがすりばちのかけを手にもつてあきれたわらわせたいとて狂言の筋がくつれてはほんのきどりちかいと

ド平) 俊寛を大路を引わたすとはおことばとも存しませぬ(富沢小三

が崩れることを嫌う様子が見て取れる。の誤りもあるが、役者が自身の演技に工夫を加えた結果、狂言の筋の誤りもあるが、役者が自身の演技に工夫を加えた結果、狂言の筋に引きれた記述と言えよう。「大路(だいじ)」のように単純な語句

沢小三郎評)
段と位そなわつて内大臣と見へませうものをおしい事じや(富政と位そなわつて内大臣と見へませうものをおしい事じや(富正、衣装や演技の不足について、指摘する部分がある。

りではすみますまい(市川十治郎評)
りではすみますまい(市川十治郎評)

られるのは当然のことで、財源の不足する村芝居ではいたしかたな衣装や化粧の不足は、江戸の大芝居を知る目からみれば不足に感じ

工夫するべきである、という点を重視した評であろう。 な装の不足に加え、役柄の演じ分けの不足をいうもので、無量であれば無量なりの動きがあってしかるべきであって、前年、前々年とれば無量なりの動きがあってしかるべきであって、前年、前々年とれば無量なりの動きがあってしかるべきであって、前年、前々年とれば無量なりの動きがあってしかるべきであるか。後者は、い部分もあるため、「惜しい」「残念」という表現が多い。後者は、い部分もあるため、「惜しい」「残念」という表現が多い。後者は、い

えられ、独自の演技・演出が作り上げられていったものだろう。書に残された芸の記録は、おそらくは正本を元に各役者の工夫が加なく、三段目を独立させて切狂言などに演じられた場合が多い。本「姫小松子の日遊」は、大芝居でもほとんど通しでの上演記録が

(二) 江戸の芸能記録

瑠璃演出がわかる部分がある。
江戸肥前座との比較で演出が記されている箇所があり、江戸の浄

しろい(市川忠太評)ひぜんの掾座ではやねしあいであつたを「平地てされたはおもひぜんの掾座ではやねしあいであつたを「平地てされたはおもまかさ大せい相手にはしごじあい御くろう〳〵[江戸者]豊竹序の切小松殿館の段(中略)それより天水おけへか、りてのこ

残っている。肥前座と外記座を混同した記述なのか、現在記録に残た立ち退く場面であるが、江戸肥前掾座では屋根仕合が行われたところを、当地の芝居では平地で演じたという。江戸肥前座で「姫小松」を演じた記録自体が見つかっておらず、傍証には欠けるが、明松」を演じた記録自体が見つかっておらず、傍証には欠けるが、明外記座において「姫小松子日の遊」の上演があり、こちらは正本も外記座において「姫小松」を演じたという。江戸肥前座で「姫小松」を演じた記述なのか、現在記録に残っている。肥前座と外記座を混同した記述なのか、現在記録に残っている。肥前座と外記座を混同した記述なのか、現在記録に残っている。肥前座と外記座を混同した記述なのか、現在記録に残っている。

ない江戸浄瑠璃の演出記録として注目しておく。っていない肥前座の上演があったものか定かではないが、記録の少

三) 善光寺町の祭礼

の」の台詞として述べられる。明和九年に祭礼狂言が行われていたことが、評文中の「善光寺も

つしやれ 大門町のきらを見せていもんだ(山下藤太評)きもの三十両の余かけて着て出た ことしこじアらい年は出や方の祭礼にきさつたがしらねいが ことしも横町のさる役者がとかく狂言はきみがでい一ひいきでいふじやないが わしらが

されていたものとみられる。出やつしやれ」などの表現からは、この頃、例年のように狂言が出の潤沢さを窺うことができる。「ことしも」「ことしこじアらい年は贅沢な衣装を競うように着飾っていた様子が見られ、門前町の資金

井三宝記』に、詳細が記録されている。や桟敷の設えられた様子が描かれるほか、天保十一年三月成立の『芋や桟敷の設えられた様子が描かれるほか、天保十一年三月成立の『芋舎光寺町の祭礼狂言については、『善光寺御祭礼絵巻』に、舞台

、月十三日十四日これを祇園会といふ。十三日西の大将乗とい 、大月十三日十四日これを祇園会といふ。十三日は天王祭なれ では、その夜も燈籠を献備するなり、十四日は天王祭なれ に、その夜も燈籠を献備するなり、十四日は天王祭なれ に、その夜も燈籠を献備するなり、十四日は天王祭なれ に、その夜大躍を奉るなり。

(中略)

小躍 先朝躍といふありて、次に狂言といふあり

善光寺の御祭礼といふなり。(善光寺大勧進条) なるねり物数多ありて賑ひ夥しく、諸国より参詣多し。これを四日祇園会なり。山車渡り、夜は芝居・狂言あり。その外古雅天王宮(別当所(※大勧進)の南にあり)例祭六月十三日・十

合大形ならず)(善光寺年中行事条) 踊狂言など美をつくせり。諸国の参詣人も足を止めて群参し賑六月祇園会(十三・十四両日祭あり。山車・幔燈おびただしく、

に大門町」の記述も、その躍当番を示すものであるのかもしれたことは確かであろう。注25の『長野市史考』では、典拠不詳ないたことは確かであろう。注25の『長野市史考』では、典拠不詳ないたことは確かであろう。注25の『長野市史考』では、典拠不詳ないたことは確かであろう。注25の『長野市史考』では、典拠不詳ないたことは確かであろう。注25の『長野市史考』では、典拠不詳ないが、「毎年躍当番の町をきめて、その町は出し物を出さず、躍りた。「大門町」の記述も、その躍当番を示すものであるのかもしれ町」、「大門町」の記述も、その躍当番を示すものであるのかもしれていた」とある。『芋井三宝記』が、天にちらでは、夜に芝居が演じられたとある。『芋井三宝記』が、天にちらでは、夜に芝居が演じられたとある。『芋井三宝記』が、天にちらでは、夜に芝居が演じられたとある。『芋井三宝記』が、天にちらでは、夜に芝居が演じられたとある。『芋井三宝記』が、天にちらでは、夜に芝居が演じられたとある。『芋井三宝記』が、天にちらでは、夜に芝居が演じられたとある。『芋井三宝記』が、天にちらでは、夜に大きいます。

(四) 塩崎

をいう台詞がある。塩崎に開帳場があり、見世物等が行われていた帳場へ出したなら入のありそうな見せものめだ(坂田源之助評)をいう台詞がある。塩崎に開帳場があり、見世物等が行われていたをいう台詞がある。塩崎に開帳場が出したなら入のありそうな見せものめだ。塩崎の開坂田源之助評中、若い者が悪口を言ったのに対し、贔屓が怒って

(五) 長谷の観音

まるゆへ当はるしばらく顔を出しても根つから参詣がなかつた近年としよつて人つきあいをやめて見たれど日みつでは気がつ開口中の長谷の観音の台詞には、

なかったものか。とある。明和九年春に開帳が行われたかと思われるが、参詣者は少とある。明和九年春に開帳が行われたかと思われるが、参詣者は少

開口

(六) 清滝観音堂

述べられる。 明和九年の夏に大がらくりを見せたことが、長谷観音の台詞中に

やうなこんきの入ル事はなる事ではこさらぬ (開口) 大がらくりを仕かけて大きな銭もふけしました 私なぞはあの清滝の同名はとしわかゆへに此なつもたきの中へ竹田まがいの

については、傍証には欠く情報が多いが、記録の乏しい地方の芸能能が存在していたことが読み取れる。(一)、(二)、(四)から(六)本書からは善光寺や周辺の各村々にも、明和期には既に種々の芸

のような禁令が出ている。 のような禁令が出ている。

様可致事事有之候は、、其最寄之村方ニ而相改、御領分地内江決而不掛事有之候は、、其最寄之村方ニ而相改、御領分地内江決而不掛一一他所ニ而河原芝居為致候節、右小屋を若御領分境目江掛候

り共相止為致申間敷候、 猥ニいたし候村方ニ而も、 迄も不作、 村方ニ而は致間敷事ニ候、新規ニ企候事は勿論、 五以下之子共躍り之外不相成、夫も当日計りニ候、 成候、尤右之通前々より致来候村方も、其当日計り獅子舞之外 二物を入、 不相成候、前々より致来候須坂町方ニ而御神事之節ニ而も、 子舞いたし来候村方者格別、廿ヶ年以来之分者、向後決而不相 し、剰獅子舞二事よせ、狂言おどりのまねかたを取しくみいた し候村方も有之趣、不埒之至ニ候、廿ヶ年前より祭礼之節、 村方ニより祭礼其外ニも近年先規無之大神楽之真似をいた 狂言らしき事縦令舞台等掛ケ不申、ねこ筵を敷候而も決而 却而人之嘲を請、 又は其外之難を申立、穴江も入度様ニ解説候者も、 口論等も難計り 折角致候処、 近遠打寄候事故、 平生手馴ざる事故、 若者共手間隙をつぶし、 村役人共吟味、近来之分は獅子舞た 何れ無益之事ニ侯、 其中ニは喧嘩買ふ之悪 不拍子たらぐくに たとひ是迄は 其上旧年之暮 寝ル目も不寝 まして況在

風水之難も計りがたく、 被仰渡書附之写 之事禁候趣意得と相弁へ可申事 シ凶作等之ばと、 之節は居屋之修覆、 しもの事、 夏作少々生立宜候得者、 夫ニ而も右躰之事 少々宛も貯へ之心掛有度ものニ候、 又は可着ものも着兼候、 扨又二三年も打続豊作ニも候は、まだ 右躰之企も間々致候、 一遣ひ捨候は無益之事ニ候、 (寛政二年戌八月 夫等之助、 取調め不申内は 御領内一統 彼是右躰 或者若 凶作

この禁令から二十年前は、 惜しんで稽古に興じる若者たちの様子も伺い知ることができよう。 たことや、 ものである。そこに、この二十年で新しく興った芸能が多く存在し 外の狂言は、 じ、二十年以前からあったものであっても、当日ばかりの獅子舞以 坂領内において二十年以来に新しく行われるようになった狂言を禁 あったことなどが、前者の記述からは伺われる。また、後者は、 行われたことがあったこと、それが領地の境界線に置かれることが ことを命じるものである。この地方で河原に小屋掛けをして芝居が することがあった場合に、関係する村方に言ってこれを改めさせる 行われていたことなどを示しているといえる。 須坂領内においても、同様に明和期頃からさかんに芸能が 他所で河原芝居を行う際に、 少し懐具合に余裕ができれば狂言につぎ込み、寝る間を 小屋がけをせず筵を敷く程度の簡便な上演でも禁じる 明和七年(一七七〇)に相当する。この 須坂領との境目に小屋がけを

述からわかる。為政者側の禁令によるものか、村々の内情によるもは、衣装に工夫をするにも自ずから限界があったことも、本書の記誇っている様子がわかる。それに比して、貧しい農村地帯において本書中にも、善光寺町においては、高価な衣装を作らせ、綺羅を本書中にも、善光寺町においては、高価な衣装を作らせ、綺羅を

があったものであろう。 があったものであろう。 があったものであろう。 があったものであろう。 があったものであろう。 であたいが、明和期の北信地方には広い範囲においてこのような動き 残された岡田の祭礼狂言は長く続けられることはなく、他の記録類 のか、いずれの理由からかは定かではないが、本書に詳細な記録の

ば、 暦中期頃より刊行された、「名物評判記」と呼ばれる作品群がある。 旅なのか、地震をきっかけとした里帰りなのかは不明ながら、この 能であるが、長らく江戸住で、江戸の芝居に親しんでいる人物で、 江戸の人間であるか、本書の記録からは厳密に割り出すことは不可 年の記録は極わずかなものでしかない。この地方の人間であるか、 岡田の祭礼狂言についても、 記録については、この年、 ついて、長期にわたっての記述が多く見られる一方で、この土地の 戸の芝居に長く親しんでいた人物であることは間違いない。 て、 う」という、 であるが、ともかく相当な芝居好きであったことは間違いない。宝 江戸から里帰りした地元出身の人物なのかもしれない。詳細は不明 土地を訪れた人物、という形を想定しておきたい。旅であるとすれ 定があったものかは、 土産として、 本書もその どを想定せねばならず、やや想定に無理があるかと思われるため、 最後に、 宝暦以前から明和頃の情報が詳細に出てくる点で、この頃の江 自身が見聞きしたことの他に、地元の人から聞いた聞き書きな 本書の筆者について触れておきたい。 一冊と考えてよいだろう。「自分もいっちょ書いてやろ 芝居仲間に読ませるために記されたものか、 筆者の得意げな様子が伝わってくる記述である。信州 知る術がない。 または近年の記録のみが見受けられる。 明和九年の詳細さに比し、前年・前々 本書の整った記述は、 江戸の芝居につい 出版の予

は信州の本屋などからの出版の予定までを想像させるものがある。

オル

注

- 文化科学研究科研究プロジェクト報告書、平成十二年三月)。期の前後における江戸文化の研究』所収、千葉大学大学院社会(1)神田由築「江戸の役者と地方興行―甲府と会津若松―」(『寛政
- (2) 明和六年二の替評『役者近集談』を含む。
- 伝えられた可能性もあり、その点については疑問が残る。おいては、これらの評判記が刊行されたとするが、写本でのみ(3) 現存本は、後に作られた写本である。注1の神田由築氏論文に

- 歌舞伎学会秋季大会口頭発表、平成十八年十二月)。(4)尾崎千佳「近世中後期における山口の芸能興行」(平成十八年度
- (5) 松崎茂著、昭和四十二年八月、松崎茂工学博士論文刊行会発行。

6

- 「平成十九年五月、吉川弘文館」において、「農山漁村で経済情(平成十九年五月、吉川弘文館)において、「農山漁村で経済情(平成十九年五月、吉川弘文館)において、「農山漁村で経済情めな規模で村民みずからによる地芝居が行われるようになったと考えられる。このことは、伝存する文書に現われる記録の端々と考えられる。このことは、伝存する文書に現われる記録の端々と考えられる。このことは、伝存する文書に現われる記録の端々と考えられる。このことは、伝存する文書に現われる記録の端々できるところである」としている。
- (7)(※)内は齊藤による注記、以下も同じ。
- 流行語。場と、人気絶頂時の出奔(明和七年二月)にあわせて流行した(8)「飛んだ茶釜が薬罐となる」は、明和五・六年頃の笠森お仙の登(
- (9) 引用文中の傍線は齊藤による。以下も同じ。
- 岩波書店)による校訂本文を用いた。 (10)『日本古典文学大系59 黄表紙洒落本集』(昭和三十三年十月)
- (11)「ふきや町の部」に、「新万や」とある。
- (12)「市村座北側茶屋部」に、「新万や三十郎」とある。『位芸名家□』(12)「市村座北側茶屋部」に、「新万や三十郎」とある。『位芸名家□』
- (13)「ふきや町北かは」の部に、「新万屋三十郎」とある
- 移転等によるものかは不明である。 との位置関係の相違が作者の記憶違いによるものか、弁天屋のる。『古今覧』には「弁天屋」の記述はなく、本書の記述と細見類妓三町伝』には、「ふきや丁かし茶やの部」に「弁天や」とあり、「位芸名家□』には、「市村座かし」の部に「弁天や吉兵衛」、『歌

- (15)「市村森田わき狂言」として、七福神の挿絵が示される。
- (16) 市村座三番叟の役割の次に、「ワキ狂言 七福神 梅がへ大おど

 $\widehat{26}$

- であろう。 される。ここからも当時の人気曲の一つであったと考えられる(17)「末待誓言葉」は、明和七年六月刊『新版増補常磐友』にも所収
- 立備考」欄参照。 (18) 詳細は、後に掲出する表1の、「見立役者名乗時期等」「役者見
- (9)延享四年(一七四七)十一月十六日初日、大坂竹本座初演。
- (20) 寛延二年(一七四九)七月二十四日初日、大坂竹本座初演。
- っても通し狂言の記録は少ない。では三段目のみを切狂言などに演じることが多く、大芝居であ)宝暦七年(一七五七)二月一日初日、大坂竹本座初演。歌舞伎

 $\widehat{21}$

- (22) 市川忠太評には、明和七年の知盛について、「手負てかへり碇のに述があるが、それ以外は配役と出来不出来を述べる程度での記述があるが、それ以外は配役と出来不出来を述べる程度での記述があるが、それ以外は配役と出来不出来を述べる程度でいる。
- (23) 浣花川上流にある九頭竜権現を指すと考えられる。

 $\widehat{24}$

- 太夫、三味線が役者を兼ねているとすれば二十五名、捕手などれる。宮崎嘉右衛門・山中左治兵衛評に、「其外かたきやく衆とれる。宮崎嘉右衛門・山中左治兵衛評に、「其外かたきやく衆とり手のやく人なそにも一々お名をそんじませぬゆへこんどはのがきました 重而大役の節 部に入て評仕らん」とあって、捕手等の端役を含めると、総勢何名が出演したものかは不明であるが、明和九年に出演した主立った役者については、評文中には揃っているとみていいであろう。
- とされ、原本にあたることはできなかった。掲載された口絵に四年四月、吉川弘文館)の口絵に写真が掲載されるが、個人蔵(25) 小林計一郎著『長野市史考―近世善光寺町の研究―』(昭和四十

- 側に桟敷席が設けられている。 よれば、善光寺西南の大勧進の南に仮設舞台が作られ、大勧進
- 二月、信濃史料編纂会発行)。

 二月、信濃史料編纂会発行)。

 二月、信濃史料編纂会発行)。

 二月、信濃史料編纂会発行)。

 三月、信濃史料編纂会発行)。

 三月、信濃史料編纂会発行)。
- 七年五月、岩波書店)。 雄校注『日本思想大系62 近代科学思想 上』所収(昭和四十「前島家農事日記」明和四年三月廿九日、四月朔日記事(古島敏

27

- 十年九月、長野県史刊行会)。(28)『長野県史 近世史料編 第八巻(一)北信地方』所収(昭和五
- (29) 中野三敏『江戸名物評判記案内』(昭和六十年九月、岩波新書)、

同『江戸名物評判記案内』(昭和六十二年六月、岩波書店)。

異体字 「薗」 再考

稿で個別の文字に関わる変更は今措くとして、大きな問題となるのは前個別の文字に関わる変更は今措くとして、大きな問題となるのは前と、そこで規定したことのうちいくつかを修正する必要が生じた。と、そこで規定したことのうちいくつかを修正する必要が生じた。と、そこで規定したことのうちいくつかを修正する必要が生じた。このたび第三期の役者評判記を翻刻するに当たり異体字をどのよ

特定の語彙に限って両用する場合がある。

園 = 薗(「宮薗」「薗八」など、その他は薗 = 園)

例

刈

苅

(「苅萱」

「和布苅」など)

梅 = 楳(「楳茂都」など)

ス = 簑(「簑助」など) など

況について報告した上で右の原則について再考する。稿ではその中で代表的な「園/薗」の場合を採り上げ、その用字状とした原則の第十である。「例」として四組の漢字を示したが、本

に限定するものであるが、「薗」の草冠はいわば虚節である。しか部首というものは一般に、付加されることで漢字の意味を狭い範囲は「園」に草冠を付加しておきながらその意味は「園」と違わない。字とは字形が異なっても音と意味とが同じものであるから、「薗」字とは字形が異なっても音と意味とが同じものであるから、「薗」字とは字形が異なっても音と意味とが同じものである。異体字であるとは大方の字書が認定する。異体

しそのように虚飾的な部首の例は数多く、「薗」の他にも

野

 \Box

隆

苅 蔭 籏 崗 靍

ていたようで、例えば新井白石『同文通考』は
といる。この種の異体字の中には中国で作られたものもあり、「薗」いる。この種の異体字の中には中国で作られたものもあり、「薗」いる。この種の異体字の中には中国で作られたものもあり、「薗」いる。この種の異体字の中には中国で作られたものもあり、「薗」にいたようで、例えば新井白石『同文通考』は

とした「訛字」の中に「薗」を挙げて「園也」としている。 フル所ノ訛字ハ彼国ノ書ニ見へシ所ナレハ今コ、ニハ載セス。 ヲイフ。異朝ノ書ニ俗訛トイフモノコレナリ。但シ異朝ノ俗用訛字トイフハ俗書ノ中アヤマリ用フルトコロ、正字ニアラサル

いうことである。この扱いは基本的に、き換えてもかまわないのだがそうせず、「薗」のままにしておくと扱い、「薗」は「園」の異体字なのだから翻刻に際して「園」に置扱い、「薗」とした。「両用する」というのはそれぞれ別の字として会がある」とした。「両用する」というのはそれぞれ別の字としては、「薗」と「薗」とを「両用する場

八節」等、比較的固有名詞に絡むことの多い点を考慮に入れた「薗」の字が、「沢井薗右衛門」「鸚歌が薗」更に下つては「薗

そのため「薗」は、 という点から両者を両用とした第一期以来の方針を踏襲したもので 扱い方は文字処理全体の中でも例外的なものではあった。 に置き換える、と複線的に扱うこととしたのであるが、そのような を厳密に保守することにはあまり積極的意義がなく、むしろこれを の例えば 「固有名詞に絡むことの多い点」 しかしそこに に収斂させてもかまわないだろうと判断したためである。 「みその」が ある場合は「薗」のまま、またある場合には「園 「特定の語彙に限って」という限定を加えたの 「御薗」と表記されていたとして、この「薗 のいわば裏返しで、 普通名詞

場合、それは「宮園」「宮薗」の両方を含む。 外した。但し欠丁その他の事由で調査を及ぼせなかった場合が少数 としたものは、 する上位概念を示すこととする。したがって例えば〈宮園〉とした お調査の対象は版行された評判記に限り、写本で行われたものは除 、薗」がどのように使用されているか、語彙別に分類して示す。 以下、今期翻刻した安永期から享和期にかけての役者評判記で「園 行文の便宜上、〈園〉という表記で「園」と「薗」とを包摂 実際に草冠のない 「園」が用いられている場合であ 通常の鍵括弧で「園」 な

は当期の評判記の随所に頻出し六十例に及ぶ多数の用例が存するの 蔵」と見えるのが唯一の例で、これだけでは何とも言いようがない。 を含むものとしては、 第一、役者の号。 一人は吾妻藤蔵で俳号を 園 を用いた役者が 対象とした評判記に現れる役者の芸名で 享和四年刊 『役者寿』 一名おり、 〈園枝〉という。この の敵役の部に こちらは複数の用例 「荻野園 園

> 部」の連名中に挙げられたもので、上から順に、年度・所属座・「表 をまとめて挙げる。いずれも役者目録の後に置かれた「狂言作者之 が、そのうちの一人〈園東八〉の表記は特に注目されるので全用例 と「薗」とは基本的には別の文字と認識されていたようである。 に偏っていると考えてよかろう。これらの偏向からすれば、当時「 れるうち四例が「志薗」、一例のみ「志園」とされている。これも「薗 ている。もう一人、市山太次郎の俳号 がいずれも「釈遊薗」と 寛政十年に没すると〈釈遊園居士〉 が一つもない、 だが、それらがすべて「園枝」と表記されていて「薗」 『役者出世の滝』『役者三升顔見世』 第二、作者名。狂言作者の中に〈園〉姓を称する者が何人かいる と顕著な偏りを見せる。 「薗」で表記され、 の法号を贈られた。この法号は 『役者初相場』の三書に見える 〈志園〉はあわせて五例見ら もっともこの吾妻藤蔵は、 生前とは逆方向に偏っ を用いた例

記」・(出典評判記)である。 天明七年 森田座 「園東八」(『役者吉書始』)

天明八年 桐座 「園東八」 (『役者五極成就]

天明九年 市村座 「園東八」 (『役者姿記評林

寛政二年 市村座 園東八」 (『役者紋選』)

寛政二年 中村座 「薗藤八」 (『役者紋選』)

寛政三年 中村座 薗藤八_ (『役者節用集』

寛政四年 市村座 「園東八」 (『役者名所図会』)

寛政五年

市村座

「園東八」

(『役者当振舞』B

寛政五年 市村座 「薗東八」 (『役者富士谺』

寛政七年 都座 薗東八」 (『役者恵宝参』

寛政七年

都座

薗東八」

(『役者人相鏡』

寛政七年 都座 「薗東八」(『役者時習講』)寛政七年 都座 「薗東八」(『役者三組盃』)

と元の 所属したので「薗藤八」を継続したが、寛政四年に市村座に復する 年になっても従来通り 後は「薗」のままだった。 字面だけは違うから別の名であると言って言えないことはない。 意識が見て取れる。「東八」と「藤八」は、 か。だとすればそこに、「園」と「薗」とを弁別する当時の人々の 村座では わち前年の天明九(寛政元)年から在籍している市村座では寛政二 けでも異なる二つの名を使い分けた結果なのではなかろうか。すな 籍した、もしくは年度中に移籍した、ということに対応して表記だ の両者は同一人物に違いない。これは一人の作者が同時に二座に在 ろう。但し寛政五年、正月刊の『役者当振舞』では「園東八」であ たものが三月刊の『役者富士谺』で「薗東八」に変わると、その -村座に「薗藤八」の名がそれぞれ別に現れる。しかしもとよりこ 役者紋選』に載る寛政二年度の座組を見ると、市村座に「園東八」、 と「薗」もその程度には異なる文字と認識されていたのであ 「園東八」に戻した、というような経緯があったのではない 「薗藤八」と表記を変え、翌寛政三年は引き続き中村座に 「園東八」としたが、 同じ「とうはち」でも 同年新たに所属した中

は「園」である。 は「園」である。 は「歯」である。 は「歯」である。 は「歯」である。 は「歯」である。 は「歯」である。 は「歯」に傾斜する。またして丹治のみ「園」一例、と全体としては「繭」に傾斜する。またして丹治のみ「園」一例、と全体としては「繭」一例であるのに対して丹治のみ「園」世の作者として〈園文平〉〈園英助〉〈園丹治〉などのは「歯」である。

礼信仰記」が十四例あるほか

「祇園守護花領巾」二例、「祇園女御

しか見当たらず、しかもことだった。しかし〈園八〉は、今期の対象とした評判記では二例〈園八〉〈宮園〉など音曲方面の固有名詞で「薗」が多く用いられる第三、音曲。第一期以来「園/薗」を両用とした根拠の一つは、

園八ふし上るりにての所作 (『役者清濁』 江戸)

義太夫・国太夫・薗八正伝なと、別れ(『役者勇兵揃』二)

例は「関」三例で「薗」が優勢である。もっともそれらの用例に対して「園」三例で「薗」が優勢である。もっともそれらの用これに対して〈宮園〉の用例数は多く、文字で数えれば「薗」十七と「園」「薗」一例ずつに分かれていて判断の材料になりにくい。

太夫 宮薗源氏太夫

同 宮薗出水太夫

同 宮薗久太夫

ワキ 宮薗宇治太夫

同

宮薗湊太夫(『役者蓼喰虫』

京

·祇園」については後述する。 九重錦」一例、「若楓園生錦」一例とあるが、すべて「園」である。

例が「園」であり、から単なる〈花園〉まで男女とりまぜて二十二例現れるうちの二十から単なる〈花園〉まで男女とりまぜて二十二例現れるうちの二十ものから挙げてゆく。まず〈花園〉は、〈花園中将〉のような呼称第五、役名。登場人物の役名で〈園〉を含むものを、用例の多い

三立目花薗中納言時房上使の出(『役者三組盃』下)

秋替リ花薗(『役者大功記』B上)

表記に何か特別な事情があるとは思われない。次に は他の評判記では概ね 郎が演じた役について記した個所で、「花薗」というのは 五例現れるうちの十三例が 曦鎧』に登場する永井右馬頭の妻〈花園〉役を指す。 の二例のみが「薗」である。このうち後者は寛政十二年に沢村国太 「花園」と表記されており、 「園」で、 薗 は ここでの 〈園部〉 しかしこの役 『大塔宮 は、 薗 +

薗部兵衛 (『役者人国記』大坂)

薗部幸崎恩愛同心之事(『役者大功記』A上)

とを特に区別せず使っていると見られる。そして役名に「薗」 部左衛門 記のある『役者人国記』大坂の巻でも他の個所では「園部の兵衛」「園 雪物語』 いられた例は以上に尽き、 る。このように数の上では 一例である。この二例を含めて 園生 「西園寺」三例などがあるが、いずれも「園」だけを用いて に登場する園部家の人々の誰かで、 |「園部おく方」 などとしているから、 (の前)」五例、 他に「祇園女御」九例、 「園源十郎」三例、 袁 〈園部〉 が「薗」を圧倒しているが、 の十五例はすべて 「薗部兵衛」という表 やはり 「園」と 「薗 「(西谷) 「園原(図書など)」 園右衛門 『新薄 一が用

との間に互換性があることを示すものと考えるべきだろう。かし右に挙げた「花薗」や「薗部」の例は、むしろ「園」と「薗」

が一つ残らず「祇園」であり「祇薗」は全く用いられない。が一つ残らず「祇園」であり「祇薗」は全六十四例あるのだが、それれ例を重複して含んだ数なので、厳密にいうと地名に由来する人名出の〈祇園祭礼信仰記〉など外題十七例および〈祇園女御〉の役名出の〈祇園祭礼信仰記〉など外題十七例および〈祇園女御〉の役名出の〈祇園祭礼信仰記〉を含む語のうち対象評判記中に最も数多く出

第七、その他。右に挙げた以外のものはほとんど普通名詞であるもの、「とうえん」と振り仮名があるもの、「とうえん」と振り仮名があるもの、「とうえん」と振り仮名があるもの、「とうえん」と振り仮名があるもの、「とうえん」と振り仮名があるもの、「とうえん」と振り仮名があるものといるのはほとんど普通名詞であるあわせて五例があるうち、

桃薗の桃の花こそ咲にけれ(『役者大通鑑』江戸

若木に変る桃薗(も、その)の尚歯会(『役者真功記』京

京の巻開口でも本文が始まってしばらくすると、「薗」を用いたのかどうかは判らないけれども、同じ『役者真功記』後者は開口の題とどちらも比較的目立つ個所で、だから装飾的なの二例が「薗」を用いる。前者は山下金作評の冒頭で引かれた発句、

語が一例だけ『役者勇兵揃』三巻に見える。と草冠が消えて「桃園」になっている。もう一つ、「陵薗」というと草冠が消えて「桃園(もゝその)にさしかゝれば、色子の尚歯会を催さんと云ければ、一座も是はゑらい思ひ付キ

也。 うゑん)がつまから付届すれは、かさねが弟子入に来るくらいわにぐち目はたゞれ目、どこにひとつとりへなく、陵薗(りや出びたいのやりおとがひ、ほうはふくれてはなびしやげ、口は

妻鏡』が城資盛のおば坂額を を発見した。 ところが日本では、寛永三年版『吾は本では、寛永三年版『吾はな宮女の容貌美麗を称える。ところが日本では、寛永三年版『吾にいる宮女の容貌美麗を称える。ところが日本では、寛永三年版『吾のである。白楽天に新楽府「陵園妾」があり、その意味する普通名詞である。白楽天に新楽府「陵園妾」は天子の陵をはいる。 「でいるの用例からすると、「陵薗」は人名でその妻は「かさね」と同じこの用例からすると、「陵薗」は人名でその妻は「かさね」と同じ

、シー | | |新題色殆可醜陵薗妾〔顔色ニ於イテハ殆ド陵薗ノ妾ヨリ醜カル| || | |

九代記』ではそのくだりを(誰で)の人に変え、別えば延宝三年刊『北条と評したあたりから誤解が生じたようで、例えば延宝三年刊『北条

トイフトモ是ニ合セテ思ヒヤルベシ、ト笑フ人モ有ケリ。醜キ事ハ登都子ガ妻・鴻伯鸞ガ室ニモ替ルマジ、嫫母・陵園妾

のではないかと推測しておく。

のではないかと推測しておく。

のではないかと推測しておく。

のではないかと推測しておく。

以上語彙別に「園/薗」の用字状況を挙げたがこれを要するに、

そしてこれは実は

園

/薗」に限ったことではない。

冒頭で「特

「祇園」「園枝」「木村園次」など全く「園」しか用いない語が多く 「祇園」「園枝」「木村園次」など全く「園」しか用いない語が多く 「祇園」「園枝」「木村園次」など全く「園」しか用いない語が多く 「祇園」「園枝」「木村園次」など全く「園」しか用いない語が多く 「祇園」「園枝」「木村園次」など全く「園」しか用いない語が多く

語彙」なのか、本末転倒の観がある。前稿ではを加えたとしてもわずか四語に過ぎず、これではどちらが「特定のく、逆に「その他の場合」の方は「花薗」「薗部」に「桃薗」「陵薗」しかしながら、その「特定の語彙」が右に挙げたように意外に多

「薗」は「園」の異体字と認められ、多くの場合は両者の間に、
あらゆる「薗」を「薗」のままとした方が単純明快で望ましい。
あらゆる「薗」を「薗」の異体字と認められ、多くの場合は両者の間に
「薗」は「園」の異体字と認められ、多くの場合は両者の間に
あらゆる「薗」を「薗」のままとした方が単純明快で望ましい。
あらゆる「薗」を「薗」のままとした方が単純明快で望ましい。
あらゆる「薗」を「薗」の異体字と認められ、多くの場合は両者の間に
のは、
のは、

用することとして特に支障はない。すなわち、 数の場合にしか適用される予定がないのである。わずかな事例のた 字というものは想定していない。したがってこの原則は、極めて少 簑」にしても、 場合に「楳」を両用するとしたけれども、幕末に興った「楳茂都流 たが、「園/薗」を除く三組のうち「梅/ 原則の対象に含めるのが妥当であると考える。これが本稿の結論で 薗」以下は他の「杯/盃」などと同様に、「常に両用する」という の語彙に限って両用する」という原則第十は廃し、例示した た方がよい。 何よりことが煩雑に及ぶ。それならばむしろ原則そのものを撤廃し めに例外的な規定を残すのは、合理的ではあっても均衡を欠くし、 はそれほど多くは見当たらず、その他に同様の扱い方をするべき文 は時期的に今期の翻刻対象には現れない。残る「刈/苅」と 定の語彙に限って両用する」という原則の適用例として四組を示し 刈 「苅」を「刈」に、 /苅」「蓑/簑」なども「園) 「簑」を「蓑」に改めるべき事例 /楳」は、「楳茂都」などの /薗」と同じく常に両 前稿で立てた「特定 園 蓑

注

伎の基礎研究』所収(1)研究成果報告書『役者評判記本文の総合的利用による歌舞注1 平成十一年度~平成十四年度科学研究費補助金基礎研究(C)

注2 笹原宏之『国字の位相と展開

注3 勉誠社文庫

月報。但し引用にあたって「薗」以外の旧字体は現行字体に改注4 原道生「翻刻覚書(五)」『歌舞伎評判記集成』〔第一期〕第六巻

注6 建仁元年六月二十八日条。なお新江注5 『振り仮名つき吾妻鏡 寛永版影印

だけ美麗であるの意であろう。書は「可配陵蘭妾」とする。「陵薗妾に配すべし」ならば、それ書は「可配陵薗妾」とする。「陵薗妾に配すべし」ならば、それよるとこの個所は本文に異同があり、「可醜陵薗妾」を北条本追建仁元年六月二十八日条。なお新訂増補国史大系『吾妻鏡』に

注7 京都大学附属図書館所蔵本

付記

のではない」(法制審議会答申)として のではない」(法制審議会答申)として のではない」(法制審議会答申)として のではない」(法制審議会答申)として のではない」(法制審議会答申)として のではない」(法制審議会答申)として

田凉埜峯嶋萠蔭駈

今後もすべて従前のそれを指すということとする。の一条を含めて異体字の処理原則で人名漢字に言及した場合、それは判断する際の基準として用いるのは全く不適切である。したがって右失われたといって過言でない。そのような性格の表を異体字についてなど数多くの異体字を含んでおり、もはや「一字種一字体の原則」がなど数多くの異体字を含んでおり、もはや「一字種一字体の原則」が

【活動記録】

2007.06.03 2007.06.10 2007.07.22 2007.12.27 2008.03.27 ~ 03.29	$2007.02.10$ $2007.03.27 \sim 03.28$ $2007.06.01 \sim 06.02$	$2006.08.18 \sim 08.20$ $2006.10.20 \sim 10.21$ $2006.12.26 \sim 12.28$ $2007.02.02 \sim 02.03$	2005.12.25 \(\sigma 27\) 2006.06.04 2006.06.11	2007.10.10 2007.11.12 2007.12.18 2007.01.29	2006.02.28 2006.03.17 2007.08.21 2007.08.22	2006.02.18 ~ 02.19 松本市(市立1,役者評判記所蔵機関・書誌調査
立命館大学アート・リサーチセンター(データ統一作業・事務局会議立命館大学アート・リサーチセンター(事務局会議)立命館大学アート・リサーチセンター(事務局会議)のやこめっせ(事務局会議)	、一ト・リサーチセンター データ統大学近松研究所 翻刻凡例検討ート・リサーチセンター 翻刻凡例	立命館大学アート・リサーチセンター 翻刻凡例検討立命館大学アート・リサーチセンター データ統一作業立命館大学アート・リサーチセンター データ統一作業立命館大学アート・リサーチセンター (翻刻作業)	専修大学 全体会キャンパスプラザ京都 事務局会議愛媛大学 (翻刻作業)	会東京都立中央図書館東京大学・国会図書館東京大学・国会図書館静嘉堂文庫・国立劇場	度点国立事物官,憂芯大学松本市(市立図書館)甲府市(県立図書館)南山大学南山大学	松本市(市立図書館) 然本市(市立図書館) 然本市(市立図書館) 然石水博物館写真調査 園田学園女子大学近松研究所 ※石水博物館写真調査機関・書誌調査
議	検討・事務局会議					